



TITLE:

京都大学結核胸部疾患研究所年報 (昭和 52 年度)

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学結核胸部疾患研究所年報(昭和 52 年度). 京都大学結核胸部疾患研究所紀要 1978, 11(1/2)

ISSUE DATE:

1978-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52198>

RIGHT:

京 都 大 学

結核胸部疾患研究所年報

昭 和 5 2 年 度

(1 9 7 8 年 3 月)

京都大学結核胸部疾患研究所

京 都 大 学

結 核 胸 部 疾 患 研 究 所 年 報

昭 和 5 2 年 度

(1 9 7 7 年)

京都大学結核胸部疾患研究所職員及準職員

(昭和53年2月1日現在)

所 長 教 授 前 川 暢 夫

(内科学第一部門)

主任教授：前川暢夫，助教授：中西通泰，講師：川合 満，助手：久世文幸，小田芳郎，江部康二，西山秀樹，講師(非常勤)：吉田敏郎，池田宣昭，今井節朗，角田冲介，中井 準，吉見輝也，松原恒雄，技能補佐員：細木春世

(内科学第二部門)

主任教授：大島駿作，助教授：小原幸信，講師：泉 孝英，助手：木野稔也，佐藤篤彦，大山口渥，門 政男，講師(非常勤)：日置辰一郎，太田 勲，中島道郎，浅田高明，福間謙助，杉本幾久雄，小松幹雄，技能補佐員：谷岡文子

(胸部外科学部門)

主任教授：寺松 孝，助教授：山本博昭，講師：伊藤元彦，助手：清水慶彦，長瀬千秋，桐林憲治，和田洋己，講師(非常勤)：中村 健，立石昭三，池田貞雄，北野司久，倉田昌彦，吉栖正之，秋山文彌，岡田慶夫，生島宏彦，外村聖一，伊東政敏，小林君美，人見滋樹，安倍隆二，張 炎森，技能補佐員：古川多宏

(病理学部門)

主任教授：安平公夫，助教授：竹田俊男，助手：高橋権也，鈴木康弘，講師(非常勤)：水島 裕，小川雄之亮，熊沢義雄，山室隆夫，森川 茂，引間啓祐，谷内 昭，技官：松下隆壽，技能補佐員：小岸久美子，奥村由美子

(細菌血清学部門)

主任教授：桂 義元，助手：竹尾漢治，講師(非常勤)：小林 博，佐渡敏彦，徳永 徹，技能補佐員：高沖悠子

(細胞化学部門)

主任教授：市川康夫，助教授：大川欣一，講師：平井圭一，助手：前田道之，講師(非常勤)：井上 壽，水谷民雄，小島清秀，技官：竹内道子，事務補佐員：入野美香

(臨床肺生理学部門)

主任教授：佐川弥之助，助教授：加藤幹夫，講師：浅井信明，助手：加藤弘文，講師(非常勤)：大橋啓吾，土肥佳郎，稻葉宣雄，安田隆三郎，真鍋 貴，久野健志，室本 仁，市谷迪雄，石部裕一，仲田 祐，田苗英次，折田雄一，山林 一，技能補佐員：服部央子，石田嘉子

(事務部)

事務長：小林 勇，事務長補佐：本間彰雄，庶務掛長：小谷雄太郎，同主任：近藤英子，小林 収，同事務官：堀田良恵，同技官：田中 稔，川原田和夫，事務補佐員：西村照子，経理掛長：清水春男，同主任：佐藤良雄，同事務官：野元頼子，奥村成和，前野正世，田中義郎，事務補佐員：中瀬安子，小倉恵美子，収入掛長：宇野定夫，同主任：畠中秀雄，同事務官：野田芳子，佐竹セツ，藤井芳克，山本正幸，事務補佐員：中村房枝，竹内孝子，集治昌代，患者掛長：氏江 実，同主任：室恵美子，事務補佐員：賀屋俊子，芦田明子，山田啓子，管理掛長：田中信雄，同事務官：前田久男，同技官：進士 悟，西川景曠，岩井昭一，松浦 康，小西喜一郎，同事務官：高安忠一，橋本敏子，水原貞子，蔭山一十四，渡辺光子

(動物飼育室)

技官：飛田 勇，門田一美，大字雪雄，安岡倉一，近藤照子

(電子顕微鏡室)

東 傳一

(附属病院)

病 院 長 (兼) 教 授：寺松 孝

(第一内科診療科)

科 長 (兼) 教 授：前川暢夫

外来医長 (兼) 講 師：川合 満

病棟医長 (兼) 助教授：中西通泰

医員 (研修医)：細川昌則，坂東憲司，望月吉郎，戸川真一

(第二内科診療科)

科 長 (兼) 教 授：大島駿作

外来医長 (兼) 講 師：泉 孝英

病棟医長 (兼) 助教授：小原幸信

医員：今井弘行，西川伸一，平田健雄，本田和徳，北市正則，松井祐佐公

(外科診療科)

科 長 (兼) 教 授：寺松 孝

外来医長 (兼) 助教授：山本博昭

病棟医長 (兼) 講 師：伊藤元彦

医員：桑原正喜，医員 (研修医)：松延政一，柳橋 健，宮本好博，浅田浩之，カレッド・レンシャード

(放射線科診療部)

科 長 (兼) 教 授：佐川弥之助

外来医長 (兼) 講 師：浅井信明，講師 (非常勤)：阿部光幸

医員：山田久和，徐 航霄，島田一恵，大井元晴，太田和夫，医員 (研修医)：三嶋理晃

(検査部)

検査部主任 (兼) 助教授：加藤幹夫，医員：木下和之，富山俊一，堀内正宏，技師長：木津 啓，技官：山岸悦子，平井 要，西尾貞子，和田ひな，本間トキエ，今井保代，増田 稔，山根すま子，前田清子，事務官：清水一枝，技術補佐員：中迫由美子，橋本晴代

(放射線部)

放射線部主任 (兼) 助教授：中西通泰，技師長：浜川純一，撮影主任：蔵岡信良，技官：大坂泰夫，曾我部康之，灘井智代子，田中龍蔵，技能補佐員：小林 忍

(薬剤部)

薬剤部長：桑田 宏，薬剤主任：澤岡平和，技官：藤原壽子，川田昌子，小林千代子，事務主任：宇野初枝，事務官：関 保子，薬剤師：川勝一雄

(看護部)

看護部長：細川ミツエ，看護婦長：中根文子，大前久野，松田比佐子，近藤信子，副看護婦長：小林とよ，斎藤千鶴子，山本喜美，技官：古府静江，岩永千代子，高市政子，安部克己，松本敏枝，講殿保子，田中松代子，小林梅野，松田富子，明石和子，小林富貴子，小川まゆみ，米山須磨子，阿部喜代子，柴田佐代子，大山峰子，岩佐純子，末田恵子，鈴木恵子，田中正子，稲田ひろ子，山中祥子，小泉カスミ，榑喜久子，井藤泰子，森 幸子，濃野ヒロ子，小嶋陽子，海老原洋子，福田千恵子，清水美位子，大場春代，稲垣美智子，松田初枝，二宮トミ子，村西直美，衛藤泰子，内藤敏子，平畑早苗，多田潤子，上里幸子，宮城登代子，渡部幸子，平良セツ子，島袋和美，亀田久美子，広川一枝，能井美千代，森 朝子，片桐久江，内木カネ子，松本不二，原田芳香

教 官 人 事

細 胞 化 学 平 井 圭 一 講 師

昭和51年4月，病理学部門講師森川茂氏の島根医科大学教授への転出に伴い，基礎系講師選出の必要を生じ，同年2月以降，基礎教官の会議において種々論議が重ねられ，52年9月，候補者選出のための選考委員会が成立し，以後委員会は候補者の公募と応募者の調査を行い，同年10月最終候補者平井圭一氏が基礎教官会議で選出され，次で教授会の承認を得た。

平井氏は昭和39年広島大学理学部生物学科を卒業，次で41年同修士課程を終了され，直ちに当研究所助手（細胞化学部）となり，現在に至っている。この間，氏は細胞内酸化酵素，過酸化酵素の組織化学的研究を着実に遂行し，50年1月以降2年間，カナダのモントリオール大薬理学教室に留学，Coté 教授，Witschi 博士らと共に障害肺の上皮修復に関する研究を行った。この研究は肺胞上皮の組織発生に関する重要な貢献を含むものとして内外の注目を浴び，今後の研究の発展が囑望されている。（安平公夫）

細 胞 化 学 前 田 道 之 助 手

昭和41年3月京大医学部卒，インターン修了後，京大ウイルス研究所癌ウイルス部の大学院生として，マウス白血病細胞の培養並びにそれら細胞から産生される白血病ウイルスの感染実験に従事。昭和46年，同研究所助手となつてからは，主として骨髓性白血病細胞に対する分化促進因子の精製に専念し，悪戦苦闘の末，それが分子量5万前後の糖蛋白であることをつぎとめた。

前田君は仕事の性質上，細胞培養の諸術式に習熟しているのは勿論，ウイルス感染実験の経験から，大量の実験動物の飼育管理にも長年に亘った蓄積があり，又，蛋白精製に関しては医化学沼教授の下で丸一年間の修練を積んで来ている。52年4月本研究所助手に転任して来たわけであるが，上記の経験からも予想されるように，同君の本研究所に対する貢献は期して待つべきものがあると考えられる。（市川康夫）

細 菌 血 清 学 桂 義 元 教 授

昭和52年4月1日付で停年退官された細菌血清学部門上坂一郎教授の後任として，同部門助手であった桂義元氏の昇任が決定，昭和52年7月1日発令された。以下に，選考経過・略歴並びに研究業績の概略について述べる。

1. 選考経過

本研究所内規により，昭和51年11月の段階で教授候補者選考委員会が発足，新教授の専門分野を「微生物学・免疫学領域の研究と教育」として，これを12月16日の全教官会議に報告，その承認を得た。直ちに所内及び全国の関連大学・研究所へ公募並びに推薦依頼の書類を発送し，締切は昭和52年1月31日とした。

2月上旬以降、応募者並びに其の後選考委員会として選考の範囲に加えた者に就て、5月下旬まで審議を続け、委員会としては一応の結論を得た。そこで委員会報告を作成、それに全候補者の資料を添えて6月13日の教授会に提出、ここで更に審議を経たのち投票を行い、その結果、桂義元氏に決定をみたものである。

2. 桂義元氏（昭和14年3月29日生）の略歴

学歴：昭和38年3月 京都大学理学部物理学科卒業
 41年3月 大学院理学研究科（修士課程）修了
 42年9月 同 （博士課程）退学
 47年5月 京大理学博士
 職歴：昭和38年4月 京都大学医学部副手採用
 39年3月 同 退職
 42年10月 京都大学結核胸部疾患研究所助手採用
 52年7月 同 教授昇任

3. 研究業績の概要

桂氏のお仕事は、(1) ウシ血清アルブミン (BSA) に対する抗体産生・細胞性免疫（遅延型過敏症 DTH）並びにトレランスの研究、特にそれらの相互関係についての研究、(2) 抗原反応性 T 細胞の定量的研究、の二つに大別することが出来る。

(1) の研究は、BSA による効果的免疫方法の確立、トレランス誘導のための諸条件の検討と云った、全く地味な方法論の検討から始まり、免疫応答とトレランスとの複雑なからみ合いを、high dose-low dose tolerance なる概念を導入することによって整理してみせたところで一段落している。次いで、不溶化した BSA を検出に用いることによって、マウスで初めてこの種のたんぱく抗原に対する DTH 誘導に成功し、ここに同一個体に同一抗原を用いて抗体産生並びに DTH を促す処置を同時に行うことが可能となったのであり、この基礎実験の上に立ってはじめ、抗体産生に関与する helper T 細胞と、DTH に関与する effector T 細胞の分化の解析に入ってゆくことが出来るようになったのである。

DTH 及びトレランスに果す T 細胞の機能に関する研究は、必然的に其の定量化への要請となり、ここにウイルスプラーク法を応用した (2) シリーズの仕事が展開されるようになったものと思われる。方法の発案者 Bloom 自身は、彼の方法でとらえられる細胞は DTH の effector T 細胞と考えていたが、桂氏等の巧みな実験の結果、その解釈の誤りが指摘され、むしろ suppressor T 細胞が定量されていることが明らかとなった。

桂氏のお仕事に一貫してみられる特徴は、一つのテーマに対して実験が組まれる際にまず方法論の検討が執拗なまでに徹底的になされていることである。そして其の検討をパスした諸術式を巧みに組み合わせてダイナミックな展開をみせて仕事が進んでゆく。此度教授に御就任になり、より多くの後進と共に、よりスケールの大きい仕事をなし遂げていかれることと期待しています。（市川康夫）

学術集会記録

I 昭和51年度学術講演会（昭和52年1月29日 楽友会館）

1. 結合組織線維成分の成熟について

病理 四方実彦, 真田浩幸, 山室隆夫, 竹田俊男

私達は数年来結合組織の主な線維成分である collagen, elastin の代謝は性ホルモンにより調節されており、その反応態度によって臓器特異的に分化した fibroblast を数種に type 分け出来ることを報告してきた。今回は

collagen, elastin が extracellular space で成熟してゆく過程に性ホルモンがどのように関与しているかを検索したので報告する。fibrous protein の成熟に関する hormonal regulation の研究は、1976年 Shoshan 等の pituitary hormone についての報告をみるのみである。実験は、マウス皮膚、骨及びラット股関節包の aging に伴う生理的推移と、ホルモン投与時にみられる変化を、collagen solubility と lysyl oxidase 活性の測定及び、elastin に関しては生化学的検索並びに電子顕微鏡的観察を行った。マウス皮膚 collagen は生後5週以後 solubility は漸減してゆくが、雄に較べて雌の方が早く、同月齢で比較すると雌の方が低く、明らかな性差がみられた。この差異を裏付けるべく、3週で卵巣剔除し、性ホルモン投与、10週で屠殺、測定すると、卵巣剔除で solubility の増加が、estradiol benzoate 投与で著明な減少がみられた。一方 Siegel, Martin の方法で骨の lysyl oxidase 活性の測定を行ってみるとその活性は4週を頂点として以後漸減するが、ここでも性差を認め、雌の方が雄より高値を示した。ホルモン処置群での骨、皮膚 lysyl oxidase 活性は、両者共 estradiol benzoate で著しい増加を示した。ところが assay tube に直接加えられた estradiol benzoate はその活性を高めなかった。ラット股関節包のエラスチン量は生後10週で雌の方が多く、生後3週で卵巣剔除し、性ホルモン投与、10週で屠殺測定すると卵巣剔除でエラスチン量は減少、estradiol benzoate 投与で増加するのがみられた。次に elastin の成熟過程を従来の uranyl-acetate, lead-citrate 染色法と ironhematoxylin lead-citrate による染色法 (Brissie R. M. et al, 1975) を併用し電顕で観察すると、aging と共に microfibril の占める area の中心部より elastin fibril が aggregate し徐々に太い elastic fiber に成熟してゆく像が観察され、雄より雌の方が又 estradiol benzoate 処置動物では control 動物に較べて、より elastic fiber は太く、成熟が早いことが分かった。

以上のことより、性的成熟以後、性ホルモンは fibrogenic cell に働いて collagen, elastin の生成を調節するばかりでなく、estrogen は細胞内で lysyl oxidase production を刺激し、その結果 extracellular space での collagen, elastin の成熟を促進することが強く示唆された。

2. 細胞性免疫の調節に関与する細胞

細菌血清 桂 義 元

1970年に、B. R. Bloom とその共同研究者は、結核菌感作によってツベルクリン (PPD) に対して遅延型過敏症 (DTH) を誘導したモルモットのリンパ節細胞を PPD と共に培養すると、vesicular stomatitis virus (VSV) の増殖を許す細胞 (VSV-replicating cell) が観察されることを報告した。すなわち、DTH の細胞レベルでの有力な解析手段として VSV-plaque 法を提出した。その後、混合リンパ球培養や mitogen によるリンパ球の刺激でも VSV-replicating cell が観察され、これらはすべて胸腺由来の T 細胞であることが示された。

この方法は、抗原特異的反応性 T 細胞を単一細胞レベルで検出する唯一の方法であるという利点がある反面、どのような機能を持った T 細胞が検出されているのかが分らないという不利がある。したがって、VSV-replicating cell と機能に関係づけることがこの方法を生かすために不可欠であると考えられる。そこで、最もよく解析がなされているヒツジ赤血球 (SRBC) に対するマウスの免疫反応にこの方法を適用して主に *in vitro* で解析を進めると共に、私達が作ってきたマウスのウシ血清アルブミン (BSA) に対する DTH の系に適用して、主に *in vivo* で解析を行なった。

SRBC 系で明らかになったことは、

- 1) SRBC 免疫マウスの脾細胞培養中に、SRBC 反応性 VSV-replicating cell が検出され、これは T 細胞である。
- 2) 培養中のヘルパー T 細胞の活性と VSV-replicating cell 数とは平行関係がない。
- 3) 免疫後の VSV-replicating cell の出現は DTH の出現より常に遅れる。すなわち、DTH が peak に達して急激に低下した時期に VSV-replicating cell 数が peak に達する。
- 4) サイクロフィスフォアマイドの前投与で DTH は非常に増強されるが、そのようなマウスでは VSV-replicating cell はほとんど全く検出されない。

BSA の系で明らかになったことは、

- 1) Freund's complete adjuvant と共に免疫したマウスに、免疫が成立した時期に VSV と可溶性抗原を投与

すると、DTH は非常に増強される。VSV のみ、あるいは可溶性抗原のみでは増強は起らない。

2) 増強は抗原特異的に起こる。すなわち二種類の抗原で免疫したマウスに一方の可溶性抗原と VSV を与えた場合、他方の抗原に対する DTH は増強されない。

これらの結果から、VSV-replicating cell は DTH-mediating T細胞ではなく、DTH を抑制する抗原特異的サプレッサー T細胞であろうと推論した。しかも、VSV を利用することによって、細胞性免疫 (DTH) を抗原特異的に増強することができるということは、たとえば、がん細胞に対する免疫反応を強めるなどの応用の可能性を含んでいるので、その線にそって研究を進めている。

3. 肺胞上皮細胞の再生とメタプラジアに関する電顕的研究

細胞化学 平井圭一

化学物質による肺胞領域の障害発生の初期変化において、最も重要な標的細胞の一つが I 型肺胞上皮細胞である。例えば、純酸素、オゾン、ブレオマイシン、ニッケルカルボニルなどで I 型細胞障害が起こると、肺胞構造の破壊に伴って肺水腫、線維芽細胞増殖、顆粒状細胞増殖が引き起こされるが、肺胞は II 型肺胞上皮細胞で覆われ修復するとされている。この時 I 型細胞の再生が II 型細胞からの cell transformation による可能性が指摘されており、この点を明確にする必要がある。

そこで我々は、BHT (butylated hydroxytoluene) による肺障害と再生の機構を検索した。マウスに BHT を 400 mg/kg の割合で腹腔内に一度投与したところ、1 日目に I 型細胞のみが障害され基底膜から脱落した。すると II 型細胞が増殖しつつ基底膜を覆い始めると共に、一部の細胞に形態変化が起こり、3-5 日目にかけて I 型細胞に変わっていったのである。BHT 投与後 7-10 日目になると、II 型細胞から再生した新しい I 型細胞と、自己増殖した II 型細胞とが正常の肺胞を再構築し、薬物障害からの回復を示した。

II 型細胞から I 型細胞への cell transformation は胎児の発生の段階でも起こることが報告されており、肺の分化に関与した cell differentiation の一段階と定義することが可能である。従って、I 型細胞障害後の細胞再生の問題を解くことは、肺胞上皮細胞の cell differentiation の機構を解明するうえで重要な意味が存在するのである。

4. 結核菌の発育に不適当な条件と化学療法 (要旨)

内科学第1部門、国療・南京都病院 池田宣昭

肺結核症の治療には色々の方法、手段がある。本日はその中から化学療法に於ける1つの問題点を取り上げたい。表題の全てについての考察は別の機会にゆずり、今回は我々内科1の教室員が手がけた試験管内実験成績を主として考えたい。

我々結核化学療法にたずさわる者の最終目標は生体的結核菌の絶滅である。ところが現実には、試験管内で人体に用いる濃度の10倍~100倍の薬剤を作用させても、結核菌はなかなか絶滅されずに生き残るものである。この生き残った結核菌をよく調べてみると耐性菌と思はれるものの他に、感受性であるのに生き残るものがある。ここに1つの重要な問題があると思う。

ところでストマイ依存性の18B株を用いた実験成績にみられる如く増殖休止状態にある結核菌には化学療法剤が作用しにくい様である。と同時に我々は0.1 γ /ml~10 γ /ml のPASをSM又はINHに加えても殺菌力あまり増加しないことを知った¹⁾。この発育阻止力は強いが殺菌力の弱いPASで結核菌の増殖を抑制し、その後INHを作用させると、一定の条件で予想通りINHの殺菌力低下を認めた²⁾。更に同様の現象をINH-PAS併用時にも認めた³⁾。又PASの前処理を行わず、いわゆるcross法でINH-PAS併用の殺菌効果をみると、PASの比較的高濃度に於いてINHの殺菌力低下を認めた⁴⁾。

これらの成績から、我々が今日迄常用して来た試験管内実験をふりかえると、その条件で温度は37°C、酸素分圧は大気分圧と等しく、PH、栄養素等々結核菌の発育には極めて適当なものである。しかもその薬剤効果の判定には主として発育阻止力を用いていたのである。この様な研究方法を結核菌の絶滅という面からみた場合何か欠けていなかったかと考えざるを得ない。一方生体内結核菌の環境は免疫などの生体防禦機構をも含めて、発育

にそれほど好条件とは考えられない。これらの考えから我々はどんな条件下の結核菌をも絶滅する化学療法に一步でも近づかねばならないと考える様になった。

そこで引続き実験したのが温度を 4°C 及び 25°C として薬剤を作用させたものである。予想通り 37°C での作用に比し極端に殺菌力は低下した、しかし 4°C と 25°C の場合の耐性は上昇しなかった^{5), 6)}。これらの成績は薬剤の種類と数に関係なく同様の傾向であった。

次に培地上の空気を CO₂, N₂, O₂ に置換して薬剤を作用させてみた。この場合は低温下で薬剤を作用させた時に比較して、薬剤濃度を高めること及び薬剤数を増加すること等により殺菌効果を増強させる可能性の高いことがほぼ明らかになった⁷⁾。

上述の諸条件の他に、培地 PH を結核菌の発育に不適当な状態とする場合が残されているが、我々は今後更に検討を加え、せめて In Vitro だけでも、どんな条件下の結核菌をも絶滅させ得る化学療法に近づきたい。

文 献

- 1) 池田宣昭, 京大結研紀要12-1, : 32. 昭和38.
- 2) 前川暢夫他. 結核 : 46-8 : 293. 昭和46.
- 3) 前川暢夫他. 結核 : 46-12 : 491. 昭和46.
- 4) 前川暢夫他. 結核 : 47-1 : 1. 昭和47.
- 5) 前川暢夫他. 結核 : 46-7 : 235. 昭和46.
- 6) 前川暢夫他. 結核 : 48-11 : 913. 昭和48.
- 7) 前川暢夫他. 日結研報告. 昭和49.

5. 肺線維症 (Fibrosing alveolitis) —特に、免疫学的発症機序について—

内科学第二 泉 孝英, 平田 健雄

昭和49年以来厚生省特定疾患肺線維症調査班(班長 村尾誠)によって、原因不明のびまん性間質性肺炎、肺線維症 (Cryptogenic fibrosing alveolitis) の全国調査が、各地医療機関の協力を得て行われた。この調査によって、生検例、剖検例を含め、病理組織学的に証明された Cryptogenic fibrosing alveolitis 症例として、近畿地方の22例を含めて、全国で183例が見出された。また、(1) 本症の予後は、至って不良で、183例中生存例は、62例にすぎない状況であること、(2) 本症の調査過程において、本症とまぎらわしい鑑別すべき疾患として、びまん性汎細気管支炎、慢性気管支炎および慢性肺感染症、アレルギー性胞隔炎、あるいは膠原病肺による肺線維症 (Fibrosing alveolitis) が、重要な疾患であることなどが指摘されている。

Cryptogenic fibrosing alveolitis の成立機序については、1. Turner-Warwick (1971), Nagaya (1973) の本症生検肺、剖検肺における Immune complex の沈着を示す所見に関する報告、あるいは、2. Bretjen (1974), 影山 (1973) の Immune complex による肺線維化病変の作成実験などの成績から、Immune complex disease ではないかという考え方が提出され検討が加えられている。

われわれは、Cryptogenic fibrosing alveolitis が、Immune complex disease, III型アレルギーによる疾患である可能性を検討するため、Penttinen (1969) によって開発された血小板凝集法を Immune complex の証明法として用いることにし、各種 Fibrosing alveolitis 症例に加えて、他の気管支肺疾患患者血清中の Immune complex の検出を試みたのでその成績について報告した。

健常人 (11例)、肺結核 (16例) では、1例の陽性例も見出されなかったが、アレルギー性肺炎では5例中2例、肺癌では5例中1例、サルコイドーシスでは、8例中1例の反応陽性例が認められた。一方、Cryptogenic fibrosing alveolitis では、8例中4例、RA に合併した Fibrosing alveolitis では4例中4例の高頻度に陽性例が認められた。さらに Fibrosing alveolitis 以外の陽性症例における凝集活性値は低値であったが、Fibrosing alveolitis 症例では、256倍の高い値を示した症例も認められ、また症例によってステロイド治療による臨床症状の改善とともに、凝集活性値の著明な低下が認められている。

このような成績は、Immune complex が Fibrosing alveolitis の発症進展に何らかの関与を行っていることを示唆する成績であると考えられる。しかし同時に、いずれの Fibrosing alveolitis でも、Immune complex が証

明されたことは、旧くより問題点とされている肺のみに病変を来す Cryptogenic fibrosing alveolitis と、RA などの全身性疾患に伴う Fibrosing alveolitis を区別すべきものであるか否かの問題点が、改めて示されたわけである。両者は臨床症状以外には、病理組織学的に鑑別できないことは、旧くより指摘されてきたが、このような免疫学的所見の面からも鑑別できないことが示されたことは、Cryptogenic fibrosing alveolitis の成立機序と考えるうえで極めて重要な所見であると考えられる。

6. 肺癌培養細胞を用いての制癌剤感受性試験の試みとその臨床応用について

胸部外科 長瀬 千秋

我々は肺癌の化学療法における薬剤の選択をより合理的に行なうために、手術時の切除癌組織から得られた肺癌細胞を培養して、制癌剤感受性試験を行なう方法を検討してきたので、現在までの成績につき報告する。

基礎実験として、1974年11月に我々が株化した L-1210 白血球細胞を人癌のモデルにして、簡便に薬剤感受性を知る方法を開発し、これをマイクロコロニー形成阻止試験と名付けた¹⁾。これはマイクロプレート (Falcon's Microtest II) の well 内で腫瘍細胞の微小コロニー (8ヶ以上の細胞からできた集落) を作らせ、制癌剤によってその数がどの程度減るかを見ることによって制癌効果を判定しようとするものである。本法を trypan blue 染色による dye exclusion method や、³H-TdR とりこみによる方法と比較したが、本法が簡便でかなり信頼に値する方法であることが確認できた。

次に、実際のヒト肺癌細胞に関してであるが、我々はあまり臨床応用を急ぐことなく、まず始めに樹立した肺癌細胞株で第2の基礎実験を行なった²⁾。株化細胞には我々の教室で株化された LK-14 (肺未分化大細胞癌由来) と LK-15 (肺腺癌由来)、および本研究所病理学教室で森川氏によって株化された HPL-GCC-1 (肺巨細胞癌由来)、HPL-GCC-2 (/), HLT-OAT-3 (肺小細胞癌由来) の計5つを用いた。検査した薬剤は MMC (マイトマイシン C)、5-FU (5-フルオロウラシル) などを始めとする計14種類である。効果判定基準には、生残率 (薬剤を作用させた well での微小コロニーの数とコントロールの well での微小コロニーの数の比) が 0.1 未満を薬剤有効、0.1 以上 1 未満をやや有効、1 を無効とする方法を用いた。その結果、次の事実を知ることができた。1) 一般的に言って、増殖の速い細胞株ほど多くの薬剤に対して感受性が高い。2) 同じ増殖速度で同じ組織型由来の2細胞株で、薬剤感受性は全く同じではなく、微妙な相違が見られ、薬剤感受性に関して言えば、個々の腫瘍はそれぞれ特有の顔を持っていると考えられる。3) 株細胞の長期継代を重ねると薬剤感受性が変化する。これは細胞の transformation によるものか、あるいは長期継代による selection の結果のためと考えられる。従って、制癌剤感受性試験を臨床に応用する場合には、培養開始後なるべく早期に試験を行なうことが望ましい。

以上の基礎実験に基くデータをふまえて、初代培養細胞で制癌剤感受性試験を2,3行なった。現在、我々はこの結果を臨床に応用している。未だ日が浅く、結果を云々できる段階ではないが、本法はその簡便さから、将来、臨床応用が十分期待されよう。

参考文献

- 1) 長瀬千秋他, 最新医学, 31. p. 1611, 1976.
- 2) 長瀬千秋他, 最新医学, 32. p. 1400, 1977.

肺生理 大井 元 晴

1974年11月から1976年10月までの2年間にわたり、京都市立病院呼吸器科、京大結研肺生理において動脈血炭酸ガス分圧 (PaCO₂) 50 torr 以上の慢性呼吸不全25例、48回の急性増悪を経験したが、5例に機械呼吸を要し、離脱できたのは2例で、結局14例が生存し、10例が死亡し、年間死亡率は21%であった。うち閉塞性障害が主であるものは12例あり、平均年齢は66.8才で、治療により PaCO₂ は45以下となる例が10例であった。拘束性例は10例で、PaCO₂ は45以下となるものは2例であった。ほとんどの症例は1年に1回程度の入院が必要であった。

酸素投与の方法は原則として24%酸素吸入で開始したが、特に酸素投与によって PaCO_2 の上昇する症例ではベンチマスクのような換気量に依存しない酸素投与を行う必要がある。

また24%酸素吸入によっても PaCO_2 の上昇する症例で、頸動脈小体刺激が主作用である Doxapram が有効であることを述べた。

いずれにしても、保存的治療で低酸素血症、高炭酸ガス血症が改善されなければ、機械呼吸を行わなければならないが、根底にある肺機能障害の根本的治療手段がないため、急性増悪を繰り返すことは不可避である。したがって慢性呼吸不全症例では日常管理が必要で、低酸素血症の進行しないうちに治療を行えば、機械呼吸に至らずに管理可能であると考えられる。

機械呼吸の適応としては急性増悪前の日常活動性が良く保たれていること、増悪因子として可逆的因子が存在すること、急性増悪の回数が少ないことがあげられ、血液ガス所見等は、急性増悪前の状態から判断すべきであり、この意味でも患者の日常管理が必要である。

シンポジウム “肺癌と免疫”

司会 大 島 駿 作

近年免疫学の進歩とともに新しい癌の免疫学的診断法や免疫療法に関する研究が盛んになってきた。我々の研究所においても癌の発生機序、病態、治療をめぐって多数の研究が行なわれており、また附属病院で診療を受ける肺癌患者数も増加の一途を辿っている。このような状況を背景にして本シンポジウムが企画された。

従来、癌の患者には先ずほとんど自然治療が見られないという経験的事実から、かつては「癌に免疫があるのか？」という素朴な疑問が抱かれた時代もあったが、本シンポジウムの内容を読んでもいただければ現代の癌研究における免疫学の重要性についてはほぼ御理解いただけることと思われる。しかし当然のことながら、癌の免疫学的研究は決して癌研究の総てではなく、その一部に過ぎない。また癌の免疫療法は現在のところ外科療法、放射線療法、あるいは化学療法と併用されるべき治療法で、癌治療全体から見ればその一部と考えられる。

本シンポジウムを機会に本研究所のみならず関連病院においても今後ますます癌に関する研究が推進され、その撲滅を達成することを期待したい。

擲筆にあたり、遠路にもかかわらず本シンポジウムに御参加いただいた徳永先生および安元先生に深く感謝致します。

(1) 肺癌と免疫：松原義人、池田貞雄（京都桂病院胸部外科）

1) 肺癌における腫瘍特異抗原

肺癌組織の蒸留水抽出液の硫酸 2.73 M, pH 3.7 で沈澱しない分画を種々のカラムクロマトグラフィーで細分画し、精製抗原を作製した。この精製抗原に対する家兎の抗血清を用いたゲル拡散法及び蛍光抗体法による検討で、腫瘍特異性が確認された。即ち、この抗原は腫瘍組織にのみ存在し、正常組織には全く認められなかった。さらに酵素抗体法による電顕により、この抗原は癌細胞の膜表面にあることが証明された。この抗原は糖蛋白で分子量約35万、免疫電気泳動では β 位に泳動され。また、この抗原は CEA と共通の抗原性を有する。

2) 肺癌における Carcinoembryonic Antigen (CEA)

肺癌患者190例、良性の呼吸器疾患151例の血中 CEA を Radioimmunoassay 法で測定した。2.5 ng/ml 以上を陽性とする、良性疾患の17%、肺癌の65%が CEA 陽性であった。

血中 CEA の測定は肺癌の早期診断又はスクリーニングとしては現段階では無力である。しかし、血中 CEA が 5 $\mu\text{g/ml}$ 以上の場合は癌と診断しても良いと考える。血中 CEA の経時的測定は、癌患者のモニタリングの一指標として有意義なもので、治療効果、再発又は腫瘍増大を判定する上で参考になる。

胸水の CEA 測定が良性又は悪性の鑑別診断に有用と思われる。

(2) 悪性腫瘍の免疫療法—BCG 療法とその作用機構を中心として—：徳永 徹（国立予防衛生研究所結核部）

近年、悪性腫瘍の免疫療法が脚光を浴び、種々の方法が開発、研究されつつあるが、人癌の免疫療法に実際に今日もっとも多く試みられているのは、BCG を主とするミコバクテリアおよびその菌体成分である。

人癌に対する BCG の投与方法は極めて多様であるが、人癌に対し多少とも有効性を示す成績が得られているのは、BCG を局所、すなわち腫瘍内への直接注射の如き、に用いた場合であり、BCG の抗腫瘍作用の機構も 2 つの場合についてもっとも詳しく検討されている。

BCG を局所に注射した場合に、最初に強く起る反応は、当然のことながら BCG に対する応答である。すなわち BCG の一部は速やかに所属リンパ節に到達し、BCG 感作 T リンパ球の増殖を促し、これが局所に還流して局所に留まった BCG と反応して種々のリンフォカインを産生放出する。これにより局所に夥しい活性化マクロファージの集積が起り、これが偶々その場に存在する腫瘍細胞を捲き込み、非特異的に破壊する。

破壊された腫瘍細胞は活性化マクロファージの貪食を受け、腫瘍抗原情報は効率よくリンパ球に渡されて、腫瘍特異免疫が成立し、腫瘍は特異的キラー細胞と、上述の非細胞傷害性マクロファージとの挾撃に会う。

これらのメカニズムを中心に、演者らの実験成績を主体として、BCG の抗腫瘍性について、種々の角度から講述を行なった。

(3) 泉 孝英（内科学第2）

ヒトにおける癌免疫の成立阻止因子として癌細胞の面からみれば、(1) Tolerance 成立の可能性、(2) 腫瘍細胞と正常細胞の間の抗原性の差の少なさ、(3) 癌細胞の表在物質が抗原性を阻止していることなどを挙げることが出来る。また、宿主の面から言えば、ツベルクリン反応の低下、DNCB 被感作能の低下にみるような T リンパ球系機能低下が指摘される。

この T リンパ球系機能低下の一因を探るべく、肺癌患者血清の免疫抑制作用の有無について、マウスの SRBC に対する PFC 反応を指標としての検索を行った成績について報告した。主なる成績は以下の様であった。

1. 肺がん患者血清の殆んど全例は、マウス脾臓のヒツジ赤血球に対する抗体産生細胞の産生を抑制した。
2. 抑制効果は、組織型、病期と関連しない。
3. 抑制効果は、患者のツベルクリン反応、リンパ球の反応性、血清蛋白分画と関連しない。
4. 抑制物質は抗体でない。
5. 56°C 30分の処理に安定な物質である。
6. 抗原刺激後に投与しては抑制効果はない。

今後、この抑制物質の本体とその作用機序について更に検討を加えたい。

追加) 浅本 仁（国立京都病院）

肺癌患者の血清中にはヒト末梢血リンパ球の EAC ロゼット形成を抑制する因子が存在することを実験的に証明した。

(4) 肺癌の免疫療法：安元公正（九州がんセンター）

近年、腫瘍免疫学の進歩により、ヒト癌においても抗腫瘍抵抗性の存在が明らかになり主として BCG 生菌を用いた非特異的免疫療法が種々の悪性腫瘍に対して試みられている。ある種の悪性腫瘍、例えば悪性黒色腫などでは臨床的な有効性が既に報告されているが、一方では BCG 生菌そのものによる重篤な副作用が報告されている。阪大、山村、東らは、BCG 菌より抽出した細胞壁成分 (BCG-CWS) が抗腫瘍効果の面で、BCG 生菌に匹敵することをみだし、かつ副作用が少いことを明らかにした。私どもは、山村、東らと共同で1974年6月以来、この BCG-CWS を用いて肺癌患者に対して免疫療法を行ってきた。今回はその2年半の結果について述べた。

対象として症例は原発性肺癌104例で、原則として、手術、放射線療法、化学療法等の治療後に2週間毎に BCG-CWS 300~200 μ g を投与した。臨床的效果が判定可能になった、Ⅲ、Ⅳ期例について生存率からみると、Ⅲ期例では50%生存期間が、対照群で約8ヶ月、BCG-CWS 治療群で18ヶ月、Ⅳ期では、それぞれ、4ヶ月、12ヶ月となり、著明な生存期間の延長が認められた。同様の生存期間の延長が、癌性肋膜炎に対する BCG-CWS の胸腔内投与によっても認められた。一方、免疫療法の免疫学的効果をみる目的で種々の試験管内試験を行ったが、その中で、PHA 反応など、同種肺癌細胞に対するリンパ球の細胞障害性は多くの症例で免疫療法の経過とともに上昇した。またその上昇した値は患者の予後とよく相関した。組織学的に免疫療法の効果がうかがわれる症例もあるが、その機作については不明の点も多く、現在解析中である。最後に副作用であるが、頻回の皮内投与で増強する皮膚反応の他は、特に重篤な副作用は認められなかった。

今後、BCG-CWS の肺癌に対する作用機作を解析し、より効果的な免疫療法の確立をめざしたい。

続いて森重福美（太刀洗病院）、山本寿（洛陽病院）、岡田慶夫（滋賀医大）、安平公夫（京大胸部研）の諸先生方と各演者との間に活発な質疑回答が交された。

II 胸部研談話会

第1回 癌原性炭化水素による発癌機構の解明にむけて 高橋権也（病理）（51.10.14）

第2回 1. 昆虫アレルギーと気管支喘息（昆虫アレルギーの重要性について） 木野稔也（内2）（51.12.2）

2. 気管支喘息の治療（特に副腎皮質機能を考慮した治療について） 川合 満（内1）

3. 総合討論 宮本昭正（東大物療内科）

第3回 Freeze-etching 法等電子顕微鏡手法による、真菌、細菌の微細構造と機能調節の研究
竹尾漢治（細菌血清）（52.3.3）

第4回 コラーゲン合成高分子複合体の医学的応用 清水慶彦（外科）（52.6.2）

第5回 白血病細胞分化促進因子の性状について 前田道之（細胞化学）（52.7.14）

第6回 呼吸ガスの平均肺胞気濃度と死腔量の新しい測定法について 藤田正憲（臨床肺生理）（52.11.24）

III 特別ゼミナール

第70回 4月16日 加藤 順三（帝京大学医学部助教授）

「ステロイドホルモンの受容体」

第71回 10月8日 沢田 英夫（東海大学医学部助教授）

「肺表面活性物質のアポ蛋白について」

第72回 11月 三尾 隆弥（神戸大学医学部）

「クロルベンゼン、PCB の代謝機序」

第73回 53年2月4日 水野 正彦（東京大学医学部助教授）

「性の分化」

第74回 53年3月4日 松尾 雄志（大阪大学蛋白質研究所助手）

「トキソホルモン研究の最近の進歩」

第2回 シンポジウム “環境発癌物質による肺癌”（52年6月25日）

人の肺癌

池 田 貞 雄（桂病院外科）

職業性肺癌

原 一 郎（大阪府立公衆衛生センター）

発癌物質特に多環芳族炭化水素の検出

松 下 秀 鶴（労働衛生研究所）

環境発癌物質による実験的肺癌と発癌機構

高 橋 権 也（京大胸部研）

IV その他

1) G. Clements, Prof. University of California.: Some problem on pulmonary surfactant. 昭53.5.30

2) W. W. L. Glenn, Prof. of Surgery, Yale University: Electrophrenic Respiration. 昭53.9.6

3) G. Cumming, Director, Midhurst Medical Research Institute: VA/Q 昭53.9.9

業 績 目 録

内 科 学 第 1

〔学 会 発 表〕

前川暢夫：結核化学療法の現時点での問題点，第52回日本結核病学会総会，特別講演，（昭52.3）

前川暢夫，川合 満，江部康二，安部隆二：気管支結核による無気肺の治療経験，日本結核化学療法研究会総会，（昭51.12）

前川暢夫，久世文幸，武田貞雄：非定型抗酸菌のマウスに対する病原性一径尾静脈感染の成績，日本結核化学療法研究会総会，（昭52.6）

前川暢夫，中西通泰，川合 満，久世文幸，小田芳郎，江部康二，西山秀樹，沢田賢三，大井豊，高田範男，山田栄一，賀戸重允，石橋達雄：呼吸器感染症に対する PC-904 の臨床効果，第25回日本化学療法学会総会，（昭52.6）

笹田昌孝，西山秀樹，沢田博義，中村 徹，内野治人，前川暢夫：白血病感染症の化学療法，第25回日本化学療法学会総会（昭52.6）

川合 満，前川暢夫：慢性通年型気管支喘息に対する aminophylline を主剤とした長期間欠輪液療法について，第27回日本アレルギー学会総会，（昭52.10）

井上 昇，馬淵尚克，山内立夫，小沢 晃，池田宣昭，陶 棟土，合田 博，吉田敏郎，直木由太郎，岡本博史，磯部喜博：RFP の使用症例の検討，（第2報），第32回国立病院療養所総合医学会，（昭52.10）

前川暢夫，中西通泰，川合 満，久世文幸，小田芳郎，江部康二，西山秀樹，坂東憲司，細川昌則，望月吉郎，松原恒雄，岩田猛邦，倉沢卓也，網谷良一，種田和清，賀戸重允，石橋達雄，長谷光雄，中井 準，山田栄一，梅田文一，角田冲介：肺癌に対する QFC 療法と OK-432，第18回日本肺癌学会総会，（昭52.10）

坂東憲司，細川昌則，西山秀樹，小田芳郎，中西通泰，前川暢夫：肺合併症を伴った SLE の1症例，第43回日本結核病学会，第13回日本胸部疾患学会近畿地方会，（昭52.11）

江部康二，望月吉郎，久世文幸，川合 満，中西通泰，前川暢夫：興味ある経過を示した結核症の2症例，同，（昭52.11）

前川暢夫，中西通泰，川合 満，久世文幸，小田芳郎，江部康二，西山秀樹，安淵義男，吉田敏郎，池田宣昭，浅田高明，光藤由己，大井 豊，山田栄一，賀戸重允，倉沢卓也，青木幸平，鴨志田正五，松井祐佐公：TUM-N による肺結核の治療，とくに TUM-N と KM, VM, CPM 等との交叉耐性について，同，（昭52.11）

前川暢夫，小田芳郎：肺結核症の悪化を見た2症例，日本結核化学療法研究会総会，（昭52.12）

前川暢夫，久世文幸，内藤祐子：Mycobacterium intracellulare 感染マウスに対する抗結核薬の併用効果，同，（昭和52.12）

西山秀樹：白血球内細菌に対する S.T. 合剤及び RFP の効果，第25回日本化学療法学会西日本支部総会，（昭52.12）

前川暢夫，中西通泰他：（協同研究），肺炎に対する Cefoxitin と Cefazoline の薬効比較試験成績，同，（昭52.12）

前川暢夫，中西通泰，山田栄一他：（協同研究）慢性気道感染症に対する PC-904 と Carbenicillin の薬効比較試験成績，同，（昭52.12）

前川暢夫，中西通泰，坂東憲司，西山秀樹，山田栄一，賀戸重允，石橋達雄，中井 準，岩田猛邦他：（協同研究），呼吸器感染症に対する T-1220 (Piperacillin) と Ampicillin の二重盲検法による薬効比較試験成績，同，（昭52.12）

〔誌 上 発 表〕

前川暢夫, 池田宣昭, 小田芳郎, 裏辻康秀, 稲掛英男: Tuberactinomycin (TUM) および Tuberactinomycin-N (TUM-N) の抗結核性に関する試験管内実験的研究, 結核, 52: 211~218, 1977.

前川暢夫, 久世文幸, 稲葉宣雄, 大井 豊, 山田栄一, 安淵義男: 未治療肺結核に対する強化化学療法に関する研究, SM・INH・RFP 併用術式と SM:INH・EB 併用術式との比較検討, 結核, 52: 299~306, 1977.

裏辻康秀: Rifampicin (RFP) の抗結核作用と作用時間に関する試験管内実験的研究, 京大胸部研紀要, 10: 1~19, 1977.

裏辻康秀: 結核菌の発育に不適当な条件と化学療法, 京大胸部研紀要, 10: 20~29, 1977.

前川暢夫, 江部康二: 結核性肺炎, 臨床と研究: 54: 3895~3898, 1977.

前川暢夫: 結核化学療法の現時点での問題点, 結核, 52: 595~601, 1977.

久世文幸, 武田貞夫, 前川暢夫: 非定型抗酸菌の諸種薬剤に対する感受性, III, *Mycobacterium intracellulare* に対する抗結核剤の併用効果について, 結核, 52: 339~343, 1977.

久世文幸, 内藤祐子, 武田貞夫, 前川暢夫: 非定型抗酸菌の諸種薬剤に対する感受性, IV, 抗結核剤の試験管内併用効果について (米国株についての検討), 結核, 52: 505~513, 1977.

久世文幸, 武田貞夫, 前川暢夫: 非定型抗酸菌の性状(III), 平板培地上における集落観察の試み(ii), 京大胸部研紀要, 10: 44~51, 1977.

前川暢夫, 中西通泰, 川合 満, 久世文幸, 小田芳郎, 江部康二, 松原恒雄, 岩田猛邦, 倉沢卓也, 種田和清, 角田沖介, 中井 準, 梅田文一, 岩崎博信, 石原享介, 黒田 昭, 山田栄一, 賀戸重允: 閉塞性呼吸器疾患に対する Bitolterol の検討: 臨床と研究, 54: 562~569, 1977.

吉田敏郎, 小沢 晃, 池田宣昭, 井上 昇: 気管支拡張剤 Clorprenaline (Effectol) の使用経験, 薬理と治療, 5: 1329~1334, 1977.

久世文幸, 倉沢卓也, 前川暢夫, 鈴木康弘: 全肺野にびまん性陰影を呈したクリプトコッカス症の1例: 日胸, 36: 443~448, 1977,

川合 満: ステロイド剤の使い方—内科から—医報フジ, No. 22; 31~33, 1977.

前川暢夫, 小田芳郎: 胸水の発生機序, 臨床と研究, 54: 1037-1041, 1977.

〔研究会, その他〕

川合 満: 気管支喘息の病態と治療, 第10回京阪神呼吸器疾患談話会, (昭52.2)

川合 満: 気管支喘息に対するステロイド療法, 京都胸部医会, (昭52.3)

川合 満, 気管支喘息治療上の留意点, 第6回岐阜アレルギー疾患研究会, (昭52.12)

中西通泰: 抗結核剤の進歩と使い方, 日本短波放送, マルホ整形外科セミナー, (昭52.12)

内 科 学 第 2

1. 免疫学の基礎的領域に関する研究

〔学会, 研究会報告〕

湊 長博, 桂 義元, 泉 孝英: Virus plaque 法によるT細胞の解析, 日米医学協力研究会結核専門部会, (昭52.3)

Minato, N., Katsura, Y., Izumi, T.: Antigen reactive lymphocytes detected by virus plaque assay, further characterization., The United States-Japan Cooperative medical science program, 12th joint conference on tuberculosis (Boston) (1977, 9)

湊 長博, 桂 義元: ウイルス感受性抗原特異的T細胞の免疫細胞学的性格・免疫応答における役割, 第7回日本免疫学会総会, (昭52.11)

西川伸一, 高沖宗夫, 泉 孝英, 桂 義元: 弱免疫原(ウシ血清アルブミン)に対する免疫記憶の in vitro で
の解析, 第7回日本免疫学会総会, (昭52.11)

〔誌上発表, 研究報告〕

湊 長博, 桂 義元, 泉 孝英: Virus plaque 法による T 細胞の解析, 昭和51年度日米医学協力計画報告書, p. 403.

Takahashi, H., Nishikawa, Y., Katsura, Y. and Izmi, T: Anti-DNP antibody response after the topical application of DNFB in mice., Immunology, 33: 589, 1977.

Katsura, Y., Inaba, K., Izumi T. and Uesaka, I: Cell-mediated and humoral immune response in mice. II. Sensitizing Conditions for delayed-type hypersensitivity. Int. Archs. Allergy appl. Immunol. 53: 329, 1977.

長井苑子, 泉 孝英: 胸腺抽出物質 (thymus extracts) に関する最近の知見, 医学のあゆみ, 103: 614, 1977.

Minato, N., Katsura, Y.: Virus-replicating T cells in the immune response of mice. 1. Virus plaque assay of the lymphocytes reactive to sheep erythrocytes., J. Exp. Med. 145: 390, 1977.

2. 結核の免疫およびアレルギーに関する研究

〔学会, 研究会発表〕

泉 孝英, 西川伸一, 長井苑子: BCG 免疫マウスにおける抗体産生, 日米医学協力研究会結核専門部会, (昭52.3)

大山口 渥, 松井祐佐公, 佐藤篤彦, 大島駿作: 遅延型反応に関する感作リンパ球の機能と動態について, 第52回日本結核病学会総会, (昭52.4)

長井苑子, 西川伸一, 泉 孝英: BCG 免疫マウスにおける抗体産生, 第38回実験結核研究会総会, (昭52.4)

泉 孝英, 長井苑子: 肺結核患者血清の免疫抑制作用について, 第39回実験結核研究会総会, (昭52.10)

大島駿作, 大山口 渥, 本田和徳: 動物におけるツベルクリンアレルギーの受身伝達機構に関する研究 - in vitro における伝達実験, 第39回実験結核研究会総会, (昭52.10)

〔誌上発表, 研究報告〕

泉 孝英, 西川伸一, 長井苑子: BCG 免疫マウスにおける抗体産生, 昭和51年度日米医学協力計画報告書, p. 358

大山口 渥, 松井祐佐公, 大島駿作: ツベルクリンアレルギーに関与する感作リンパ球の機能と動態について, 昭和51年度日米医学協力計画報告書, p. 419

3. 肺癌に関する研究

〔学 会 発 表〕

北市正則, 泉 孝英, 浅本 仁, 古田睦広: 肺癌と所属リンパ節の研究, リンパ節の組織像と予後について, 第66回日本病理学会総会, (昭52.4)

泉 孝英, 杉之下俊彦, 長井苑子: 肺癌患者血清中の免疫抑制作用因子に関する研究, 第5回日本臨床免疫学会総会, (昭52.6)

北市正則, 泉 孝英, 浅本 仁, 古田睦広, 森岡茂治, 筒井大八: 肺癌と所属リンパ節の研究, リンパ節の形態と予後, 第18回日本肺癌学会総会, (昭52.10)

泉 孝英, 杉之下俊彦, 長井苑子: 肺癌患者の免疫機能に関する研究, (第6報) 肺癌患者血清の免疫抑制作用の作用機序, 抑制作用因子の性状および特異性に関する検討, 第18回日本肺癌学会総会, (昭52.10)

本田和徳, 今井弘行, 門 政男, 木野稔也, 泉 孝英, 小原幸信, 大島駿作, 森岡茂治, 杉本幾久雄: 片側性肺疾患を既往にもつ肺癌症例の検討, 第18回日本肺癌学会総会, (昭52.10)

泉 孝英, 長井苑子, 杉之下俊彦: 肺癌患者血清の免疫抑制作用, 第27回日本アレルギー学会総会ワークショップ「癌と免疫」, (昭52.10)

〔誌 上 発 表〕

本田和徳, 河野知弘, 筒井大八, 森岡茂治, 井上寛治, 宮本信昭, 福森重剛, 平野政夫: 原発性肺癌の臨床的観察, 高知市民病院紀要, 2: 47, (昭52)

浅本 仁, 古田睦広, 川上一郎, 堺 幹太, 早川道雄, 北市正則, 泉 孝英: 肺癌と免疫. I. 肺癌における所属リンパ節の形態と予後, 医療, 31: 503, (昭52)

4. 気管支喘息に関する研究

〔学 会 発 表〕

Kino, T., Oshima, S.: Studies on bronchial asthma due to insects. The importance of moth and butterfly as allergens which cause bronchial asthma., International conference on pneumology and of european specialist physicians, Messina, Italy (1977, 3)

木野稔也, 今井弘行, 大島駿作: 昆虫による気管支喘息の研究. 第Ⅳ報. トビケラの吸入アレルギーとしての意義と RAST による特異的 IgE の検出, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52. 4)

木野稔也, 今井弘行, 大島駿作: 昆虫による気管支喘息の研究. 第Ⅴ報. 昆虫アレルギー検出のための問題点, 第27回日本アレルギー学会総会, (昭52. 10)

〔誌上発表, 研究報告〕

木野稔也, 大島駿作: 慢性閉塞性呼吸器疾患ことに気管支喘息における環境因子に関する研究, 昭和51年度環境庁公害防止等調査研究委託費による報告書

木野稔也: 昆虫による気管支喘息—気管支喘息のアレルゲン, 特に蛾および蝶について, 京都大学結核胸部疾患研究所紀要, 10: 30, (昭52)

木野稔也, 今井弘行, 松井祐佐公, 大島駿作: Hexoprenaline (レアノール®) の気管支喘息に対する臨床評価, 新薬と臨床, 26: 1649, (昭52)

5. サルコイドーシスに関する研究

〔学会, 研究会発表〕

泉 孝英: サルコイドーシス患者血清の免疫抑制について, 厚生省特定疾患サルコイドーシス調査研究班昭和51年度第2回班会議, (昭52. 2)

泉 孝英, 西川伸一: Kvein 反応に関する研究. (第3報) Edinburgh 抗原の使用経験, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52. 4)

三上理一郎, 泉 孝英, 他: サルコイドーシス患者の心電図異常所見について, (第2報) 心電図経過の検討, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52. 4)

立花暉夫, 泉 孝英, 他: 5年以上広範な肺病変が残存したサルコイドーシス症例の検討, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52. 4)

泉 孝英, 本間日臣, 他: サルコイドーシス急性発症例の検討, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52. 4)

〔誌 上 発 表〕

三上理一郎, 泉 孝英, 他: サルコイドーシス最近の進歩 (座談会記事), 内科, 40: 1008, 1977.

泉 孝英: サルコイドーシス, 診断基準とその使い方, Medicina 臨時増刊, p. 2056, 1977.

Izumi, T.: Experience with an Edinburgh Kveim antigen in Japan, Z. Erkrank. Atm-Org, 149: 286, 1977.

Izumi, T. Hiraga, Y et al: Diagnostic routes in cases with single involvement in eyes suspected of sarcoidosis, Z. Erkrank. Atm-Org, 149:101, 1977.

6. 肺線維症に関する研究

〔学会, 研究発表〕

泉 孝英, 平田健雄, 大島駿作: 肺線維症例における circulating immune complex の証明とその意義に関する研究, 昭和51年度文部省科研費総合研究(A)「原因不明の肺線維症の実態ならびに本態究明に関する研究」班会議, (昭52.3)

平田健雄, 泉 孝英: 肺線維症例における circulating immune complex の証明とその意義について, 厚生省特定疾患肺線維症調査研究班昭和51年度第2回班会議, (昭52.3)

平田健雄, 大島駿作, 泉 孝英: Fibrosing alveolitis における Immune-complex に関する検討, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52.4)

北谷文彦, 泉 孝英, 三上理一郎: 近畿地区における肺線維症の現状(第3報), 特別報告, 第43回日本結核病学会近畿地方会および第13回日本胸部疾患学会近畿地方会, (昭52.11)

〔誌上発表, 研究報告〕

泉 孝英, 平田健雄: 特集, 原因不明のびまん性間質性肺炎「免疫」, 最新医学, 32:1089, (昭52)

泉 孝英: Cryptogenic fibrosing alveolitis について—Turner-Warwick 教授に聴く—, 最新医学, 32:1172, (昭52)

辻 周介, 大島駿作, 泉 孝英, 平田健雄: 免疫学的研究—肺線維症例における circulating immune complex の証明とその意義に関する研究—, 文部省科学研究費助成総合研究(A), 原因不明の肺線維症の実態ならびに本態究明に関する研究, 昭和49, 50, 51年度研究業績総括集, p. 65, (昭52.3)

7. 産業性肺疾患に関する研究

〔学 会 発 表〕

Izumi, T.: Immunological findings in chronic beryllium disease., International conference on pneumology and of european specialist physicians, Messina, Italy (1977, 3)

北市正則, 西川伸一, 平田健雄, 小原幸信, 泉 孝英: 慢性ベリリウム肺に関する研究, (第3報) 慢性ベリリウム肺とサルコイドーシス肺病変の病理組織学的鑑別点について, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52.4)

8. 呼吸器疾患の免疫学的研究

〔学 会 発 表〕

泉 孝英, 長井苑子, 杉之下俊彦: 呼吸器疾患患者の免疫学的動態に関する研究, (第5報) 血清の免疫抑制作用について, 第17回日本胸部疾患学会総会, (昭52.4)

杉之下俊彦, 泉 孝英: ヒト血清中の免疫抑制作用物質に関する研究. (第2報) 作用機序に関する検討, 第39回日本血液学会総会, (昭52.5)

今井弘行, 木野稔也, 大島駿作: 各種胸部疾患における血清 IgE 値とその分布に関する研究, 第5回日本臨床免疫学会総会, (昭52.6)

杉之下俊彦, 長井苑子, 泉 孝英: ヒト血清の免疫抑制作用に関する研究, (第3報) 肺癌, サルコイドーシス, 肺結核患者血清の抗 SRBC-PFC 産生抑制作用の機序に関する研究, 第27回日本アレルギー学会総会, (昭52.10)

Izumi, T., Fukuma, K., Kobara, Y., Oshima, S., Sagawa, Y., Teramatsu, T., Maekawa, N.: Analysis of the patients with diffuse disseminated reticular and miliary shadows—Survey at Chest Disease Research Institute of Kyoto University during the past ten years., Fifth Asia Pacific Congress on Disease of the Chest (1977, 11)

〔誌 上 発 表〕

大島駿作: 免疫異常と肺, 現代医療, 9:321, 1977.

真弓哲二：呼吸器疾患におけるリンパ球に関する免疫学的研究. 第1篇 呼吸器疾患における末梢血リンパ球の Subpopulation に関する研究, 京都大学結核胸部疾患研究所紀要, 10: 60, (昭52)

9. 症例報告

〔学 会 発 表〕

鈴木博史, 泉 孝英, 他：特異な胸部レ線像を呈した肺野型サルコイドーシスの一例, 第93回日本内科学会近畿地方会, (昭52. 9)

本田和徳, 佐藤篤彦, 小原幸信, 大島駿作：胸膜に広汎な病像を呈した胸腺腫の2例, 第93回日本内科学会近畿地方会, (昭52. 9)

近藤敬一郎, 泉 孝英, 他：開胸肺生検を行った PIE 症候群（遷延型）の1例, 第43回日本結核病学会近畿地方会, 第13回日本胸部疾患学会近畿地方会, (昭52. 11)

北市正則, 大山口渥, 小原幸信, 大島駿作, 西谷定一：排菌陽性肺結核治療中に対側肺門部に発見された小細胞未分化癌の1剖検例, 第43回日本結核病学会近畿地方会, 第13回日本胸部疾患学会近畿地方会, (昭52. 11)

10. 講演会, 談話会など

泉 孝英：特別講演「肺線維症」第6回兵庫県東部六市胸部疾患談話会, (昭52. 3)

泉 孝英：間質性肺炎(2)肉芽性間質性肺炎, 第12回大阪呼吸器疾患談話会, (昭52. 5)

木野稔也：Radioallergosorbent test (RAST) とその臨床応用, 京都国立病院水曜セミナー, (昭52. 6)

門 政男：肺癌患者における PHA 皮内反応について, PHA 皮内反応検討会, (昭52. 6)

大島駿作：寝汗について, テレビドクター, MBS (毎日) テレビ, (昭52. 8)

泉 孝英：肺癌患者の免疫抑制作用を用いた肺癌の診断, 第7回京大臨床免疫研究会, (昭52. 9)

大島駿作：肺癌について, 第7回今治市・越智郡・周桑医師会医学講演会, (昭52. 11)

胸 部 外 科 学 部

〔学 会 発 表〕

1. 腫 瘍

長瀬千秋：肺癌培養細胞を用いての制癌剤感受性試験の試みとその臨床応用について, 昭和51年度京大胸部研講演会, (昭52. 1)

松原義人, 池田貞雄：肺癌における腫瘍特異抗原, 昭和51年度京大胸部研講演会シンポジウム「肺癌と免疫」, (昭52. 1)

立石昭三他：当院における小細胞型未分化癌の臨床, 第26回肺癌学会関西支部会, (昭52. 1)

玉田二郎, 前里和夫, 人見滋樹：高熱, 類白血病反応を呈し, ブラ内浸潤の疑われた肺癌の2例, 第26回肺癌学会関西支部会, (昭52. 1)

岡田英彦, 倉田昌彦他：肺転移を来した悪性内皮腫の1例, 第26回肺癌学会関西支部会, (昭52. 1)

二宮和子, 宮本茂充, 桑原正喜, 滝俊彦, ニツ矢義一, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄：レ線と興味ある経過をたどった肺癌の1例, 第26回肺癌学会関西支部会, (昭52. 1)

宮本茂充, 滝 俊彦, 桑原正喜, ニツ矢義一, 松原義人, 二宮和子, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄：心筋内転移を来した肺癌症例の1例, 第26回肺癌学会関西支部会, (昭52. 1)

松原義一, 宮本茂充, ニツ矢義一, 滝 俊彦, 桑原正喜, 二宮和子, 池田貞雄, 甲斐隆義, 船津武志：肺癌における CEA 測定の意義, 第26回肺癌学会関西支部会, (昭52. 1)

伊藤元彦, 長瀬千秋, 福田治男, 高嶋義光, 青木稔：肺門部にみられる気管支腺腫瘍の臨床的ならびに病理学的検討, 第26回肺癌学会地方会, (昭52. 1)

北野司久：免疫化学療法の可能性について（癌の免疫療法及び免疫化学療法における基礎的研究と臨床的研究），厚生省癌研究助成金班会議，（昭52.2）

伊藤元彦，長瀬千秋，高嶋義光，青木 稔，安倍隆二，寺松 孝：肺癌切除例の10年生存率，第77回日本外科学会総会，（昭52.4）

長瀬千秋，青木 稔，高嶋義光，伊藤元彦，寺松 孝，北野司久：肺癌治療における制癌剤感受性試験の意義について，第17回日本胸部疾患学会総会，（昭52.4）

松原義人，池田貞雄，滝 俊彦，桑原正喜，宮本茂充，ニッ矢義一，二宮和子，甲斐隆義，船津武志：呼吸器疾患における CEA 測定の意味，第17回胸部疾患学会総会，（昭52.4）

横山和敏，倉田昌彦，岡田英彦：乳腺粘液癌 6 例の検討，第121回近畿外科学会，（昭52.6）

北野司久，高嶋義光，柳沢 彌，藤野久武，田中敬正，青木 稔，光岡明夫，長瀬千秋：Nu マウスの皮下に移植されたヒト悪性腫瘍の Tumorigenesis について，日本臨床免疫学会，（昭52.6）

倉田昌彦，他 4 名：乳癌組織中の Estrogen, Progesterone, Prolactin 受容体について，第20回日本胸部外科学会関西地方会，（昭52.6）

岡田英彦，倉田昌彦，横山和敏：胸腺腫を伴った成人型慢性赤芽球症の 1 例，第20回日本胸部外科学会関西地方会，（昭52.6）

勝田宏重，坂東義清，茂幾俊武，中路忠司，坂東政敏：縦隔血管外皮腫の 1 例，第20回日本胸部外科学会関西地方会，（昭52.6）

立石昭三，他：京都市立病院における絨腫肺転移例について，第20回胸部外科学会関西地方会，（昭52.6）

前里和夫，玉田二郎，人見滋樹：後縦隔奇形腫の 1 例，第20回日本胸部外科学会関西地方会，（昭52.6）

北野司久，高嶋義光，弘野慶次郎，宮林美福，市谷迪雄，青木稔，長瀬千秋：肺癌における CEA の臨床的意義，第20回日本胸部外科学会関西地方会，（昭52.6）

北野司久，吉田恵三子，西川光重，稻田満夫：CEA RIA Kit（ダイナボット）の基礎的ならびに臨床的検討，近畿核医学研究会，（昭52.6）

長瀬千秋，笹田昌孝：in vitro におけるセファランチンの制癌効果について，第 3 回アルカロイド研究会（昭52.6）

伊藤元彦，寺松 孝：肺癌症例における気管支分岐部上皮の変化，厚生省がん研究助成金池田班班会議（昭52.6）

長瀬千秋，伊藤元彦：Microplate 法による制癌剤の選択，厚生省がん研究助成金服部班班会議（昭52.6）

松延政一，長瀬千秋，伊藤元彦他 4 名：コンピューター（C.T.）断層の肺癌診断への応用について，第20回日本胸部外科学会関西地方会（昭52.6）

長瀬千秋，寺松 孝：Microplate を用いる制癌剤感受性試験（肺癌培養細胞での薬剤感受性の検討），第25回日本化学療法学会総会（昭52.6）

長瀬千秋：in vitro における制癌剤感受性試験とその臨床，昭和52年度厚生省がん研究助成金“人癌培養”（関口）班第1回班会議（昭52.7）

倉田昌彦，岡田英彦，横山和敏，佐々木 学，内田 実，武内敦郎：乳癌根治手術後 2 年目に骨シンチグラフィで肋骨に異常集積像を認め遠隔転移が疑われた 1 例，第26回乳癌研究会（昭52.7）

岡田英彦，倉田昌彦，横山和敏，近藤敬一郎，室本 仁：高令者肺癌手術の問題点，第27回肺癌学会関西支部会（昭52.7）

北野司久，高嶋義光，弘野慶次郎，宮林美福，市谷迪雄，東辻英郎，相原雅展：癌の免疫療法における parameter としての skin test の役割，肺癌学会関西支部会（昭52.7）

前里和夫，玉田二郎，人見滋樹：癌性胸膜炎に対する処置，第27回日本肺癌学会関西支部会（昭52.7）

玉田二郎，前里和夫，人見滋樹：胸水糖値が低値を示した癌性胸膜炎の 4 症例・胸水糖低値症例の検討，第27回日本肺癌学会関西支部会（昭52.7）

青木 稔，長瀬千秋，伊藤元彦，寺松 孝：高令者肺癌に対する 外科治療，第 27 回肺癌学会関西支部会（昭52.7）

二宮和子, 宮本好博, 宮本茂充, ニッ矢義一, 桑原正喜, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄, 長瀬千秋: BCG による結核散布を来した転移性肺癌の1例, 第27回日本肺癌学会関西支部会(昭52.7)

宮本好博, 池田貞雄, 船津武志, 甲斐隆義, 松原義人, 二宮和子, ニッ矢義一, 桑原正喜, 宮本茂充, 今井節郎, 浅井信昭: 肺結核に合併した腺癌の1例, 第27回日本肺癌学会関西支部会(昭52.7)

坂東義清, 辰巳明利, 茂幾俊武, 中路忠司, 勝田宏重, 伊東政敏: 珍しい縦隔腫瘍の1治験, 第10回岡山胸部疾患懇話会(昭52.8)

松延政一, 他: 無気肺を示す肺癌の1例, 第2回CT懇談会(昭52.8)

桐林憲治, 長瀬千秋, 伊藤元彦, 寺松孝: BCG-CWS の局所投与が著効を示した腺癌の1例, 第27回日本肺癌学会関西支部会(昭52.7)

Morihsa Kitano, Chiaki Nagase: Clinical evaluation of CEA in human lung cancer, Asian Cancer Conference (昭52.9)

伊藤元彦: 肺癌手術の合併療法, 日本胸部外科学会総会シンポジウム(昭52.9)

長瀬千秋, 青木稔, 伊藤元彦, 高嶋義光, 寺松孝: 転移性肺腫瘍の治療方針—その手術適応に関する臨床的検討, 第30回日本胸部外科学会総会ラウンドテーブルディスカッション(昭52.9)

長瀬千秋, 青木稔, 高嶋義光, 伊藤元彦, 北野司久: 前上部縦隔原発悪性腫瘍の病理学的再検討(とくに樹立2細胞株での分析を中心に), 第30回日本胸部外科学会総会(昭52.9)

人見滋樹, 船津武志, 加藤康夫, 中納誠也, 他11名: 肺, 縦隔及び食道腫瘍例における縦隔病変の内視鏡的検索とその意義, 第30回日本胸部外科学会総会(昭52.9)

人見滋樹, 玉田二郎, 前里和夫他5名: 転移性肺癌の手術適応(術前検査を中心に), 第30回日本胸部外科学会総会ラウンドテーブルディスカッション(昭52.9)

北野司久, 高嶋義光, 弘野慶次郎, 市谷迪雄: 肺癌の免疫化学療法の可能性…… Target cell の Antigenicity の立場からの検討, 日本胸部外科学会(昭52.9)

倉田昌彦, 岡田英彦, 横山和敏, 近藤敬一郎, 室本仁, 田中寛, 松延政一, 長瀬千秋, 伊藤元彦: CT スキャンによる縦隔腫瘍の検討, 第30回日本胸部外科学会総会(昭52.9)

長瀬千秋, 青木稔, 伊藤元彦, 高嶋義光, 北野司久: 各種人癌細胞培養株の制癌剤に対する感受性の検討, 第36回日本癌学会総会(昭52.10)

池田貞雄, 松原義人, 桑原正喜: 肺癌組織中の腫瘍特異抗原の検索・プロナーゼを用いた新しい抽出法による精製抗原について, 第36回日本癌学会総会(昭52.10)

長瀬千秋, 青木稔, 伊藤元彦, 高嶋義光, 北野司久: ヒト縦隔原発悪性腫瘍由来の2細胞株の樹立, 第36回日本癌学会総会(昭52.10)

長瀬千秋, 青木稔, 伊藤元彦, 寺松孝, 北野司久, 高嶋義光, 藤尾彰, 笠原憲二, 斉藤幸人, 香川輝正: Microplate を用いる制癌剤感受性試験の試み(第4報), 第15回日本癌治療学会総会(昭52.10)

北野司久, 高嶋義光, 市谷迪雄, 杉山正敏, 青木稔, 光岡明夫, 長瀬千秋: 担癌生体の免疫反応(3) Carcino Embryonic Antigen の立場からの検討, 日本癌治療学会(昭52.10)

高嶋義光, 北野司久, 杉山正敏, 青木稔, 長瀬千秋: ノードマウスを用いる制癌剤感受性検査法(第1報)……基礎的研究, 制癌剤適応研究会(昭52.10)

北野司久: 癌免疫の基礎と臨床, 特別講演・近畿郵政局管内病院学術集談会(昭52.10)

佐藤新太郎, 安淵義男: 化学療法により興味ある経過をたどった肺の扁平上皮癌, 国立病院: 療養所学会(昭52.10)

長瀬千秋: 培養系細胞による抗腫瘍剤の試験管内検定, 昭和52年度文部省がん特(1)“造血器腫瘍細胞”(脇坂)班第1回班会議(昭52.10)

浜本康平, 立石昭三他: 当院における癌性胸膜炎の治療方針, 第18回肺癌学会総会(昭52.10)

長瀬千秋, 青木稔, 伊藤元彦, 寺松孝, 高嶋義光, 北野司久: 肺癌培養細胞を使つての制癌剤感受性試験とその肺癌化学療法への応用, 第18回日本肺癌学会総会(昭52.10)

松延政一, 長瀬千秋, 和田洋己, 伊藤元彦他: コンピューター断層(C.T.)の肺癌診断への応用, 第18回日本

肺癌学会総会 (昭52.10)

玉田二郎, 前里和夫, 人見滋樹: 癌性胸膜炎への対処—胸水の生化学的性状と胸膜癒着術を中心に, 第18回日本肺癌学会総会 (昭52.10)

桑原正喜, 船津武志, 松原義人, 宮本好博, 人見滋樹, 宮本茂充, ニッ矢義一, 二宮和子, 池田貞雄, 甲斐隆義, 長瀬千秋, 伊藤元彦, 寺松 孝: 縦隔鏡検査成績と肺癌の予後について, 第18回日本肺癌学会総会 (昭52.10)

北野司久, 高嶋義光, 宮林美福, 市谷迪雄, 大石まり子, 西川光重, 蔵田駿一郎, 稲田満夫, 種田和清, 倉沢卓也: 免疫化学療法(3)・肺腫瘍のマーカーとしての CEA の臨床的意義, 日本肺癌学会 (昭52.10)

二宮和子, 池田貞雄, 松原義人, 宮本好博, 宮本茂充, 桑原正喜, ニッ矢義一, 甲斐隆義, 船津武志, 長瀬千秋: 肺癌の多剤併用化学療法 (FUMCET), 第18回日本肺癌学会総会 (昭52.10)

松原義人, 池田貞雄, 桑原正喜, ニッ矢義一, 宮本茂充, 宮本好博, 二宮和子, 船津武志: 癌性胸膜炎の診断における胸水中の Carcinoembryonic Antigen (CEA) の意義, 第18回日本肺癌学会総会 (昭52.10)

松原義人, 桑原正喜, 池田貞雄: 肺癌患者における CEA 測定 (第2報), 第36回日本癌学会総会 (昭52.10)

伊藤元彦, 長瀬千秋, 福田治男, 高嶋義光, 青木 稔: “異常酵素”産生肺癌の形態学的所見, 日本肺癌学会総会 (昭52.10)

高嶋義光, 杉山正敏, 北野司久, 藤尾 彰, 笠原憲二, 青木 稔, 長瀬千秋: Nu マウス皮下に移殖されたヒト肺癌細胞の動態の検討, 日本肺癌学会 (昭52.10)

Motohiko Ito, Chiaki Nagase, Takashi Teramatsu: Significance of palliative resection for advanced lung cancer, 5th Asia Pacific Congress on Diseases of the Chest.

Motohiko Ito: Fire side conference “Lung cancer”, 5th Asia Pacific Congress on Diseases of the Chest (52.11)

Morihisa Kitano, Yoshimitsu Takashima, Chiaki Nagase: Tumorigenesis of tumors in Nu-mouse transplanted from human lung cancer, Asia Pacific Congress on Disease of the Chest (52.11)

Yoshito Matsubara, Masayoshi Kuwabara, Sadao Ikeda, Takashi Teramatsu: Carcinoembryonic Antigen (CEA) in patients with Lung Cancer, 5th Asia Pacific Congress on Disease of the Chest (52.11)

Chiaki Nagase, Motohiko Ito, Takashi Teramatsu: In vitro Sensitivity Testing of Human Lung Tumors to Anti-neoplastic Agents and Its Clinical Applications, 5th Asia Pacific Congress on Disease of the Chest (52.11)

長瀬千秋, 伊藤元彦, 寺松 孝, 宮本好博: 縦隔リンパ節の sarcoid reaction と耳下腺の papillary cystadenoma lymphomatosum を合併した原発性肺癌の1例, 第13回日本胸部疾患学会近畿地方会 (昭52.11)

松延政一, 和田洋己, 伊藤元彦, 寺松 孝, 倉田昌彦他: コンピューター断層の肺癌診断の応用について, 第13回日本胸部疾患学会近畿地方会 (昭52.11)

宮本茂充, 池田貞雄, 宮本好博, 桑原正喜, ニッ矢義一, 松原義人, 畠中陸郎, 二宮和子, 船津武志: 末期肺癌の疼痛に対する Brompton-Mixture の効果, 第13回日本胸部疾患学会近畿地方会 (昭52.11)

岡本交二, 岡部 学, 宮本寛, 西内 素, 中村隆澄, 山家 武, 庄村東洋, 吉栖正之, 内田博也, 三村六郎, 小引孝雄: 肺 Adenoacanthoma の1手術例, 122回近畿外科学会 (昭52.11)

前里和夫, 玉田二郎, 人見滋樹他1名: 気管支線維肉腫の1治験例, 第122回近畿外科学会 (昭52.11)

岡田英彦, 倉田昌彦, 近藤敬一郎, 本田裕宏: 肺原発性血管外皮腫の1例, 第122回近畿外科学会 (昭52.11)

上野陽一郎, 秋山久彌, 篠崎 拓, 田村康一, 島本先臣: 当院に於ける肺癌手術治療成績, 第13回中部肺癌学会 (昭52.11)

伊藤元彦: 肺小細胞癌の細分類と手術予後, 厚生省がん特別研究服部班班会議 (昭52.11)

北野司久: 免疫療法を中心として, パネルディスカッション “今日の肺癌治療”……合併療法とその問題点, 中部肺癌学会 (昭52.11)

北野司久, 吉田恵三子, 西川光重, 稲田満夫: 肺癌における CEA の臨床的意義, CEA 研究会 (昭52.12)

長瀬千秋: BCG-CWS局所大量投与の試みと, immunopotentiator の in vitro における screening test の試み, 昭和52年度 CWS 研究会 (昭52.12)

2. 胸腺・免疫

馬場満男, 富山俊一, 光岡明夫, 森川 茂: フェリチンによるマクロファージ毒性及びその細胞性免疫への影響, 第66回日本病理学会総会 (昭52. 4)

松谷之義, 青木 稔, 松本守海, 山本博昭, 寺松 孝: 異所性胸腺の発生学的検索, 日本胸部外科学会総会 (昭52. 9)

松谷之義, 青木 稔, 松本守海: 胎生期における異所性胸腺の検索, 共済医学会 (昭52. 9)

光岡明夫, 寺松 孝, 富山俊一, 原田孝之, 馬場満男, 森川 茂: マウス遅延型過敏症における非特異的 suppressor T細胞—cyclophosphamide 効果による解析, 第7回日本免疫学会総会 (昭52. 11)

森川 茂, 富山俊一, 原田孝之, 馬場満男, 光岡明夫: 抗原特異的 T細胞によるマウス遅延型アレルギーの調節—T細胞による2重調節機構の存在, 第7回日本免疫学会総会 (昭52. 11)

馬場満男, 鈴木幸雄, 森川 茂, 富山俊一, 原田孝之, 光岡明夫: Ferritin による macrophage 機能の選択的抑制及びその免疫反応解析への応用, 第7回日本免疫学会総会 (昭52. 11)

和田洋己, 西川伸一, 湊 長博, 桂 義元: 抗ハプテン抗体産生における carrier 反応性 B細胞の影響, 第7回日本免疫学会総会 (昭52. 11)

3. 結 核

人見滋樹, 玉田二郎, 前里和夫: 結核病床が無い総合病院に於ける結核管理——院内感染の観点から, 第52回日本結核病学会総会要望課題 (昭52. 4)

山本博昭, 松谷之義, 渡部 智, 寺松 孝: 膿胸腔縮小術における若干の工夫, 第52回結核病学会総会 (昭52. 4)

山家 武, 大井 勉, 宮本 覚, 西内 素, 中村陸澄, 千種弘章, 庄村東洋, 吉栖正之: 人工気胸後膿胸に対する外科療法について, 第121回近畿外科学会 (昭52. 6)

青木 稔, 松谷之義, 松本守海: 膿胸腔縮小術における若干の工夫, 第26回共済医学会 (昭52. 9)

山本博昭, 渡部 智, 松谷之義, 桐林憲治, 松本守海, 和田洋己, 加藤弘文, 長瀬千秋, 清水慶彦, 伊藤元彦, 寺松 孝, 空洞性病変に対する空洞形成術, 第30回日本胸部外科学会 総会, ラウンドテーブルカンファレンス (昭52. 9)

二ツ矢義一, 松原義人, 池田貞雄, 船津武志, 二宮和子, 宮本茂充, 宮本好博, 桑原正喜, 畠中陸郎: 多発結節陰影を認めた肺結核症, 第43回日本結核病学会近畿地方会 (昭52. 11)

長瀬千秋, 伊藤元彦, 寺松 孝, 平井圭一, 宮倍隆二, 宮本好博: 気管支形成術後の再狭窄に対してプレオマイシン局注が効果を示した気管支結核の1例, 第122回近畿外科学会 (昭52. 11)

4. 人工材料

Yasuhiko Shimizu, Seiichi Matsunobe, Hiroaki Yamamoto, Takashi Teramatsu, Seizo Okamura, Tsunetoshi Hino: Study on composites of collagen and synthetic polymer, The second international symposium for artificial organs (52. 8)

日野常稔, 山岡仁史, 岡村誠三, 清水慶彦, 寺松 孝: コラーゲン合成高分子複合体の生体適合性に対する各種架橋法の効果, 第7回医用高分子シンポジウム (昭52. 11)

Yasuhiko Shimizu, Yoshihiro Miyamoto, Takashi Teramatsu, Seizo Okamura, Tsunetoshi Hino: An Experimental Study on Artificial Trachea using a Composite of Collagen and Synthetic Polymer, 5th Asia and Pacific Congress on Disease of the Chest (52. 11)

松延政一, 清水慶彦, 和田洋己, 山本博昭, 寺松 孝, 日野常稔, 岡村誠三: 細胞培養法による合成高分子材料の組織親和性の検定——特にコラーゲン合成高分子複合体の検定について——, 第15回日本人工臓器学会大会 (昭52. 11)

渡辺 智, 清水慶彦, 山本博昭, 寺松 孝, 遠藤治郎, 村地 孝, 日野常稔: コラーゲン被覆合成高分子担体への酵素固定化の試み, 第15回日本人工臓器学会大会 (昭52.11)

宮本好博, 松延政一, 加藤弘文, 清水慶彦, 安倍隆二, 寺松 孝, 岡村誠三, 日野常稔: コラーゲン合成高分子複合体を用いた人工気管の研究, 第15回日本人工臓器学会大会 (昭52.11)

加藤弘文, 松延政一, 清水慶彦, 山本博昭, 寺松 孝, 日野常稔, 岡村誠三: 新医用材料, Poral Silica Composite への Heparin 固定化について, 第15回人工臓器学会大会 (昭52.11)

5. 心・血 管

篠崎 拓, 秋山文彌, 島本光臣, 田村康一, 上野陽一郎: 僧帽弁交連切開術後の再狭窄, 第7回日本心臓血管外科学会総会シンポジウム (昭52.2)

田村康一, 秋山文彌, 篠崎 拓, 島本光臣, 上野陽一郎: 冠動脈瘤2例の手術経験, 第103回静岡県外科医会集談会 (昭52.2)

島本光臣, 秋山文彌: 人エペースメーカー植込み後の死亡例と心筋電極, 第1回人エペースメーカーセミナー (昭52.2)

島本光臣, 秋山文彌, 篠崎拓, 田村康一, 上野陽一郎: 心筋硬塞後に発生した VSD 兼左室瘤の手術治験, 第103回静岡県外科医会集談会 (昭52.2)

中村隆澄, 大井 勉, 宮本 覚, 西内 素, 千種弘章, 庄村東洋, 吉栖正之: Intraaortic Balloon Pumping (IABP) の適応に関する実験的・臨床的検討, 第41回日本循環器学会総会 (昭52.4)

野々山 明, 福中道男, 佐藤 正, 藤尾 彰, 犬迫 努, 増田 与, 香川輝正, 庄村東洋, 吉栖正之, 勝田宏重: 10才以下の幼小児の僧帽弁置換術の経験, 第14回日本小児外科学会総会 (昭52.5)

吉川純一, 高木義博, 大脇 嶺, 加藤 洋, 柳原皓二, 鈴木隆夫, 奥町富久丸, 吉田 清, 吉栖正之, 庄村東洋: 僧帽弁後尖腱索断裂の超音波像〜 とくに Bland-White-Garland 症候群の超音波所見, 第13回日本超音波医学会総会 (昭52.5)

田村康一, 秋山文彌, 篠崎 拓, 島本光臣, 上野陽一郎: Sinusoid 型冠動脈瘤の1例, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

宮本 覚, 大井 勉, 西内 素, 中村隆澄, 山家 武, 庄村東洋, 吉栖正之: 先天性冠動脈瘤の手術適応に関する検討, 第43回日本循環器学会近畿地方会総会 (昭52.6)

西内 素, 大井 勉, 宮本 覚, 中村隆澄, 山家 武, 庄村東洋, 吉栖正之: 開心術後急性期における隆圧剤の効果, 第43回日本循環器学会近畿地方会総会 (昭52.6)

吉栖正之, 馬場国蔵, 深谷 隆, 富田安彦: 小児心疾患における圧・Biplane Cine-ACG 同時記録による圧・容量関係について (第2報) ——各種左室拡張期 Compliance の指標—— 第43回日本循環器学会近畿地方会総会 (昭52.6)

中路忠司, 坂東義清, 茂幾俊武, 勝田宏重, 伊東政敏: 乳児血管輪の手術治験, 第73川岡山外科学会 (昭52.6)

吉栖正之, 大井 勉, 宮本 覚, 西内素, 中村隆澄, 山家 武, 庄村東洋: 完全型心内膜床欠損症根治術における両房室弁拡大術, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

千種弘章, 大井 勉, 宮本 覚, 西内 素, 中村隆澄, 山家 武, 庄村東洋, 吉栖正之: 非特異性炎症によると考えられる多発性心室瘤の1治験例, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

中村隆澄, 大井 勉, 宮本 覚, 西内 素, 山家 武, 庄村東洋, 吉栖正之: IABP の合併症について, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

山家 武, 大井 勉, 宮本 覚, 西内 素, 中村隆澄, 庄村東洋, 吉栖正之: 長時間体外循環における血行動態について, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

伊東政敏, 勝田宏重, 中路忠司, 茂幾俊武, 坂東義清, 馬場 清, 田中陸男: 乳幼児期 (2才未満) 心手術の経験, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

島本光臣, 秋山文彌, 篠崎 拓, 田村康一, 上野陽一郎, 泰江弘文: 心筋硬塞後中隔穿孔の外科的検討, 第30

回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

柳原皓二，加藤 洋，大脇 嶺，高木義博，奥町富久丸，鈴木隆夫，吉田 清，吉川純一，庄村東洋，吉栖正之：僧帽弁後尖拡張期粗動，第30回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

西内 素，宮本 覚，中村隆澄，山家 武，庄村東洋，吉栖正之：開心術後患者管理における左室後負荷軽減効果について，第30回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

宮本 覚，西内 素，中村隆澄，山家 武，庄村東洋，吉栖正之：先天性冠動脈異常の外科療法——とくに手術適応に関する考察——，第30回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

吉栖正之，大井 勉，宮本 覚，西内 素，中村隆澄，山家 武，庄村東洋，馬場國藏：心内膜床欠損症手術における房室弁逆流防止対策，第30回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

馬場國藏，深谷 隆，富田安彦，宮本 覚，山家 武，西内 素，中村隆澄，庄村東洋，吉栖正之：ファロー四徴根治術後遠隔期における左心機能，第30回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

中村隆澄，大井 勉，宮本 覚，西内 素，山家 武，庄村東洋，吉栖正之：IABP の Weaning に関する考察，第30回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

庄村東洋，大井 勉，宮本 覚，西内 素，中村隆澄，山家 武，吉栖正之，吉川純一，千種弘章：心筋硬塞に対する外科的療法の意義，第30回日本胸部外科学会総会（昭52.9）

篠崎 拓，秋山文彌，島本光臣，田村康一，上野陽一郎：52才のE L D手術治験例を中心に16手術例の検討，第4 回日本循環器学会東海地方会（昭52.10）

柳原皓二，吉川純一，大脇 嶺，加藤 洋，高木義博，奥町富久丸，石原 隆，久代英範，片上秀喜，庄村東洋，吉栖正之：左冠動脈肺動脈起始（Bland-White-Garland 症候群）の心音図学的検討，とくに冠動脈造影所見との対比，第15回臨床心音図研究会（昭52.10）

岡部 学，岡本交二，宮本 覚，西内 素，中村隆澄，山家 武，庄村東洋，吉栖正之：三尖弁狭窄を伴ったEbstein 病の1 治験例，第122回近畿外科学会（昭52.11）

庄村東洋，吉栖正之，山家 武，中村隆澄，西内 素，宮本 覚，岡本交二，岡部 学：動脈疾患に対する血管外科的治療に関する検討，第30回兵庫県医師会設立記念医学会（昭52.11）

高木義博，加藤 洋，大脇 嶺，柳原皓治，奥町富久丸，石原 隆，庄村東洋，吉栖正之：僧帽弁前尖腱索断裂による僧帽弁閉鎖不全の超音波所見，第32回日本超音波学会研究発表会（昭52.11）

加藤 洋，大脇 嶺，柳原皓治，奥町富久丸，高木義博，石原 隆，吉川純一，庄村東洋，吉栖正之：心室中隔破裂の超音波所見，第32回日本超音波学会研究発表会（昭52.11）

宮本 覚，庄村東洋，山家 武，中村隆澄，西内 素，岡本交二，岡部 学，吉栖正之：心室瘤に合併した心室性頻脈に IABP が奏切した例，第1 回大動脈バルーンパンピング研究会（昭52.12）

伊東政敏，辰己明利，坂東義清，茂幾俊武，中路忠司，田中陸男，馬場 昇，武田修明：先天性風疹症候群に合併した乳児 PDA+PS の手術治験例，第32回日本循環器学会中国地方会総会（昭52.11）

茂幾俊武，辰己明利，坂東義清，中路忠司，伊東政敏：高令者心房中隔欠損症の治療経験，第32回日本循環器学会中国地方会総会（昭52.12）

中村隆澄，岡部 学，岡本交二，宮本 覚，西内 素，山家 武，庄村東洋，吉栖正之：IABP のあと外科治療を行った急性心筋硬塞の1 例，第44回日本循環器学会近畿地方会総会（昭52.12）

加藤 洋，片上秀喜，久代英範，石原 隆，高木義博，奥町富久丸，柳原皓二，大脇 嶺，吉川純一，岡部学，岡本交二，宮本 覚，西内 素，中村隆澄，山家 武，庄村東洋，吉栖正之：急性心筋硬塞後心破裂の6 例，破裂前の臨床像について，第44回日本循環器学会近畿地方会総会（昭52.12）

柳原皓二，片上秀喜，久代英範，石原 隆，高木義博，奥町富久丸，加藤 洋，大脇 嶺，吉川純一，岡部学，岡本交二，宮本 覚，西内素，中村隆澄，山家 武，庄村東洋，吉栖正之：僧帽弁前尖腱索断裂の1 例；とくに心エコー図，心音図所見について，第44回日本循環器学会近畿地方会総会（昭52.12）

日並史成，早川正徳，小山 治，福原正博，大西一男，文藤昇治，豊川清子，足立和彦，高橋延之，種本基一郎，吉川純一，吉栖正之，庄村東洋：Aortic Valve Vegetation の1 治験例，第44回日本循環器学会近畿地方会総会（昭52.12）

西内 素, 岡部 学, 岡部交二, 宮本 覚, 中村隆澄, 山家 武, 庄村東洋, 吉栖正之: 開心術後患者管理における Mean Systolic Ejection Rate の意義, 第44回日本循環器学会近畿地方会総会 (昭52.12)

6. 一般胸部疾患

勝田宏重, 坂東義清, 茂幾俊武, 中路忠司, 伊東政敏: 開胸・開心術後急性腎不全症例に対する人工透析開始時期の検討, 第41回日本循環器学会総会 (昭52.4)

光岡明夫, 外村聖一: 肺病変を初発症候とした膠原病の3症例, 第1回滋賀呼吸器疾患談話会 (昭52.4)

甲斐隆義, 松原義人, 池田貞雄, 滝 俊彦, 桑原正喜, 宮本茂充, ニツ矢義一, 二宮和子, 船津武志: 重篤な呼吸不全の対策とその指標, 第17回日本胸部疾患学会総会 (昭52.4)

桑原正喜, 池田貞雄, 宮本茂充, 滝 俊彦, ニツ矢義一, 松原義人, 二宮和子, 船津武志, 甲斐隆義: 自然気胸の保存的治療——ハイムリッヒバルブの利用——, 第17回日本胸部疾患学会総会 (昭52.4)

玉田二郎, 前里和夫, 人見滋樹: 関電病院式深部結紮器を用いた胸腔鏡下肺生検法——第2報臨床的研究——, 第17回日本胸部疾患学会総会 (昭52.4)

伊藤元彦, 長瀬千秋, 福田治男, 光岡明夫, 高嶋義光, 青木 稔: 気管支肺胞系の防禦機構としての気管支腺の意義, 日本胸部疾患学会総会 (昭52.4)

大井文晴, 立石昭三他: 慢性呼吸不全に対する末梢化学受容体刺激剤 (Doxapram hydrochloride) の有効性について, 第17回日本胸部疾患学会総会 (昭52.4)

Toshihiko Taki, Rikuro Hatakenaka, Masayoshi Kuwabara, Yoshito Matsubara, Chiaki Nagase, Sadao Ikeda: Surgical Treatment of the Spontaneous Pneumothoraces and its Pathological Findings, XXVI Congress of the International Association of Broncho-Pneumology (52.5)

立石昭三: 気管支内異物の透視下除去, 第1回京都救急研 (昭52.6)

桑原正喜, 船津武志, 宮本茂充, ニツ矢義一, 松原義人, 二宮和子, 甲斐隆義, 池田貞雄: 高令者の気胸に対する治療, 第121回近畿外科学会 (昭52.6)

松原義人, 池田貞雄, 桑原正喜, 宮本茂充, ニツ矢義一, 甲斐隆義, 二宮和子, 船津武志: 肺癌術後患者における Carcinoembryonic Antigen (CEA), 第121回近畿外科学会 (昭52.6)

宮本茂充, 桑原正喜, 船津武志, ニツ矢義一, 松原義人, 二宮和子, 甲斐隆義, 池田貞雄, 宮本好博: 自然気胸の両側手術14例の検討, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

桑原正喜, 宮本茂充, 船津武志, ニツ矢義一, 松原義人, 二宮和子, 甲斐隆義, 池田貞雄, 宮本好博: 当院における縦隔鏡検査101例の検討, 第20回日本胸部外科学会関西地方会 (昭52.6)

佐藤新太郎: Vanishing Tumor 2例, 第3回京都医学会 (昭52.9)

寺松 孝: 肺手術のこつ, 日本胸部外科学会卒後教育セミナー (昭52.9)

松原義人他8名: 胸壁・心のう・横隔膜合併切除の対策; 人凍結乾燥硬膜の使用, 第30回日本胸部外科学会総会 (昭52.9)

桑原正喜他8名: 自然気胸の外科的治療——その手術適応と予後について, 第30回日本胸部外科学会総会 (昭52.9)

松谷之義, 青木 稔: 圧力型ボディプレシスモグラフの使用経験, 共済医学会 (昭52.9)

立石昭三他: 咯血の救急処置——特に気管支動脈栓塞について, 第17回近畿救急医療研究会 (昭52.9)

寺松 孝: 開胸術, 手術手技研会 (昭52.10)

長瀬千秋: 自然気胸の成因に関する病理学的研究, 昭和52年度厚生省自然気胸研究班第1回班会議招請講演 (昭52.10)

篠崎 拓, 秋山文彌: 特別報告前胸壁変形特に漏斗肺の外科治療, 第32回日本胸部疾患学会東海地方会 (昭52.11)

二宮和子, 桑原正喜, 宮本茂充, 宮本好博, 池田貞雄, ニツ矢義一, 畠中陸郎, 松原義人, 船津武志: 肺底部のレ線検査法—Angulated Basal View (ABV) について, 第13回日本胸部疾患学会近畿地方会 (昭52.11)

近藤敬一郎, 倉田昌彦, 岡田英彦, 横山和敏, 室本 仁, 本田裕宏, 泉 孝英: 開胸肺生検を行なった PIE

症候群（遷延型）の1例，第13回日本胸部疾患学会近畿地方会（昭52.11）

立石昭三他：気管支動脈栓塞について，第13回日本胸部疾患学会近畿地方会（昭52.11）

青木 稔，松本守海，松谷之義，山本博昭，加藤幹夫：ストレインゲージによる呼吸パターンの分析，日本胸部疾患学会関西地方会（昭52.11）

玉田二郎，前里和夫，人見滋樹：胸水糖低値症例の検討，第13回日本胸部疾患学会近畿地方会（昭52.11）

人見滋樹，玉田二郎，前里和夫，他3名：金療法中，間質性肺炎を来した生検組織中の金定量をしえた2例，第13回日本胸部疾患学会近畿地方会（昭52.11）

Hiroaki Yamamoto, Morimi Matsumoto, Kenji Kiribayashi, Yasuhiko Shimizu, Takashi Teramatsu: Diaphragm-plasty for obliteration of dead space in thoracic Surgery, Vth Asia Pacific Congress on Diseases of the Chest (52. 11)

Masayoshi Kuwabara, Sadao Ikeda, Rikuro Hatakenaka, Shigemitsu Miyamoto, Yoshihiro Miyamoto, Takeshi Funatsu, Giichi Futatsuya, Kazuko Ninomiya: Management of Spontaneous Peumothorax, 5th Asia Pacific Congress on Diseases of the Chest (52. 11)

玉田二郎，前里和夫，人見滋樹：新しい胸腔持続吸引器の試作——逆流阻止弁，安全圧装置，空気漏出発見装置，残存死腔判定装置の組合せによる吸引器，第122回近畿外科学会（昭52.11）

二ツ矢義一，桑原正喜，松原義人，池田貞雄，宮本茂充，宮本好博，畠中陸郎，二宮和子，船津武志：膿胸に合併したエンドトキシシンショックの1例，第122回近畿外科学会（昭52.11）

宮本茂充，宮本好博，桑原正喜，二ツ矢義一，松原義人，畠中陸郎，二宮和子，船津武志，池田貞雄：自然気胸の外科的療法；とくに壁側胸膜部分切除術の併用について，第122回近畿外科学会（昭52.11）

清水慶彦：シンポジウム 気管気管支形成術，第47回 ACCP 日本支部定期講演会（昭52.12）

中島道郎，立石昭三他：慢性呼吸不全に併発する自発性気胸とその対策，第18回近畿救急研（昭52.12）

倉田昌彦：縦隔疾患の新しい診断法 CT スキャン，第23回大阪呼吸器疾患懇話会（昭52.12）

人見滋樹：縦隔疾患の新しい診断法—胸腔造影，縦隔鏡，胸腔鏡検査—，大阪呼吸器疾患懇話会シンポジウム（昭52.12）

〔誌 上 発 表〕

1. 腫 瘍

前里和夫，玉田二郎，人見滋樹：癌性胸膜炎に対する処置，関西電力病院医学雑誌 Vol. 9, 1977

前里和夫，玉田二郎，人見滋樹：後縦隔奇形腫の1例，関西電力病院医学雑誌 Vol. 9, 1977

佐藤新太郎，伊藤元彦，長瀬千秋：胸水中の肺巨細胞癌と肺腺癌との細胞像の比較検討，京大結核胸部研紀要 Vol. 10, 1977

伊藤元彦，長瀬千秋：癌化学療法における Urokinase 併用の意義，診療と新薬 Vol. 14, 1977

Y. Hirata, C. Nagase, M. Ito, et al.: Two cases of multiple hormone producing small cell carcinoma of the lung. Coexistence of Tumor ADH, ACTH, and β -MSH, Cancer Vol. 38, 1976

長瀬千秋，青木 稔，高嶋義光，伊藤元彦，北野司久：マイクロプレートを用いる制癌剤感受性検査法（第2報）—肺癌培養細胞に対する制癌剤の増殖阻止効果の検討，最新医学，Vol. 32, No. 7, 1977.

島本光臣，秋山文彌，篠崎 拓，加藤弘文，田村康一，泰江弘文，表 信吾，永尾正尾，滝沢明憲，国島睦意：心筋へ浸潤転移をおこした胸腺腫の1例，日本胸部臨床 Vol. 36, 1977.

寺松 孝：進行肺癌の治療，胸部外科 Vol. 30, 1977.

伊藤元彦，長瀬千秋，高嶋義光，青木 稔，安倍隆二：進行肺癌に対する非根治的な切除の意義，胸部外科 Vol. 30, 1977.

2. 胸腺・免疫

S. Morikawa, M. Baba, T. Harada, A. Mitsuoka: Studies on delayed hypersensitivity in mice III. Evidence

for suppressive regulatory T₁-cell population in delayed hypersensitivity, J. Exp. Med. Vol. 145, 1977.

伊藤元彦：胸腺の外科——胸腺液性因子の観点から，日本胸部外科学会雑誌 Vol. 25, 1977.

3. 結 核

山本博昭，加藤幹夫：臨床呼吸器病講座 3；膿胸，1977.

4. 人 工 材 料

清水慶彦，安倍隆二，寺松 孝，岡村誠三，日野常稔：コラーゲン合成高分子複合体の生体との結合様式および結合力と長期成績について，人工臓器 5巻 Supplement, 1976.

Y. Shimizu, R. Abe, T. Teramatsu, S. Okamura, T. Hino: Studies on copolymers of Collagen and a Synthetic polymer; First Report—Experimental Study on Biocompatibility of Laminar Copolymers of Collagen and a Synthetic Polymer, Biomat. Med. Dev. Art. Org., Vol. 5, 1977.

5. 心・血 管

伊東政敏，勝田宏重，中橋正明，川本皓一郎，真鍋英夫：心臓カテーテル検査前投薬としてのベンザリンの使用経験，薬理と治療 Vol. 5, 1977.

秋山文彌：Massachusetts General Hospital, 病院視察印象記，米国カナダ心臓外科視察記，胸部外科 Vol. 10, 1977.

吉川純一，大脇 嶺，柳原皓二，加藤 洋，鈴木隆夫，高木義博，奥町富久丸，庄村東洋，吉栖正之：Bland-White-Garland 症候群の超音波所見，呼吸と循環 Vol. 25, 1977.

馬場國蔵，深谷 隆，富田安彦，庄村東洋，吉栖正之：小児期心疾患における圧・Biplane Cine-ACG 同時記録による左室・右室圧容量関係について——（第1報）左室・右室圧容量曲線——，呼吸と循環 Vol. 25, 1977.

6. 一般胸部疾患

人見滋樹：縦隔鏡検査法の現状，現代外科学大系年刊追補B1977.

伊藤元彦，長瀬千秋，光岡明夫，永田明義，原田孝之，森川 茂：気管支腺の機能と構造に関する研究(1); 感染防禦機構としての気管支腺の意義について，日本胸部疾患学会雑誌 Vol. 15, 1977.

桑原正喜，松原義人，宮本茂充，滝 俊彦，二ツ矢義一，二宮和子，船津武志，甲斐隆義，池田貞雄：ハイムリッヒバルブによる気胸の治療，日本胸部臨床 Vol. 36, 1977.

渡部 智，伊藤元彦，山本博昭，佐川弥之助，加藤幹夫，佐藤公彦：食道平滑筋腫の3治験例，京大結核胸部疾患研究所紀要 Vol. 10 1977.

人見滋樹，玉田二郎，前里和夫：逆流阻止弁，安全圧装置付き胸腔低圧持続吸引器の意義，日本胸部臨床 Vol. 36, 1977.

玉田二郎，人見滋樹：胸腔低圧持続吸引器の改良——逆流阻止弁および安全圧装置付き吸引装置の開発，日本胸部外科学会雑誌 Vol. 25, 1977.

光岡明夫，外村聖一，和田洋己，松延政一，金沢 進：胸水を伴う肺炎により発見された SLE の1症例——膠原病性肺病変の診断について——Med. Postgraduates Vol. 15, 1977.

山本博昭，松谷之義：経気管支生検，臨床科学 Vol. 13, 1977.

病 理 学 部 門

〔研 究 業 績〕

1. 肉芽研究グループ（安平他）

ペニシラミンの抗肉芽形成作用の検討が，肺に結核菌ロウDを投与した兎を使用して行なわれた．Dペニシラ

ミン 50 mg/体重 kg 毎日腹腔注入の兎で、著しい抗肉芽形成作用が認められたが、多少の追加実験を行なった後発表の予定である。

2. 結合組織研究グループ（竹田他）

非常勤講師山室隆夫氏（近大教授）は10月1日付、本学医学部整形外科教授に御就任。同門下で竹田との協同研究者浜弘道氏は引続きイギリス留学中。佐藤君は研究を終り、井上君は浜松に転出。目下真田、四方、浜本、細川の諸君に加えて新しい参加者石井正治君等がこのグループの担い手である。

〔誌 上 発 表〕

Yamamuro, T., Hama, H., Takeda, T., Shikata, J. and Sanada, H.: Biomechanical and hormonal factors in the etiology of congenital dislocation of the hip joint. Internat. Orthopaed. 1: 231, 1977.

〔学 会 発 表〕

四方実彦、真田浩幸、山室隆夫、竹田俊男：結合組織成分の成熟について、昭和51年度京大胸部研学術講演会（昭52.1）

竹田俊男、真田浩幸、四方実彦、浜本 肇、上羽康夫、山室隆夫：結合組織に関する実験的研究 5, Estrogen の線維性蛋白成熟促進作用について、第66回日本病理学会総会（昭52.4）

真田浩幸、四方実彦、山室隆夫、竹田俊男：結合組織に関する実験的研究 6. 加齢及び性ステロイドホルモンの骨におよぼす影響について、第66回日本病理学会総会（昭52.4）

四方実彦、真田浩幸、山室隆夫、竹田俊男：関節包靱帯結合組織に関する実験的研究—ラット股関節包弾力線維形成に及ぼす加齢及び性の影響について—、第50回日本整形外科学会総会（昭52.4）

真田浩幸、四方実彦、浜本 肇、山室隆夫、竹田俊男：加齢及び性ステロイドホルモンの骨に及ぼす影響、第50回日本整形外科学会総会ラウンドテーブルディスカッション(Ⅷ)「骨の老化」(昭52.4)

浜本 肇、上羽康夫、順藤容章、竹田俊男：Dupuytren 拘縮に関する形態学的並びに生化学的研究、第9回日本結合組織学会総会（昭52.7）

真田浩幸、四方実彦、浜本 肇、上羽康夫、山室隆夫、竹田俊男：線維性蛋白成熟に関する実験的研究、第9回結合組織学会総会（昭52.7）

岡 正典、山室隆夫、嶋 充浩、竹田俊男、四方実彦、真田浩幸：各種結合組織に及ぼす成長ホルモンの影響 第1報：皮膚、関節軟骨、骨端軟骨、肺コラーゲン量の変化、第9回日本結合組織学会総会（昭52.7）

井上邦雄、富士森良輔、佐山重敏、竹田俊男：真性ケロイド由来培養線維芽細胞に関する研究、第9回日本結合組織学会総会（昭52.7）

竹田俊男、C. S. Yao, 井上邦雄、佐山重敏、富士森良輔、細川昌則、松村敦子、櫛田秀雄：3T₆ 変異細胞株の諸特性について、第9回日本結合組織学会総会（昭52.7）

Inoue, K., Fujimori, R., Sayama, S. & Takeda, T.: Studies on the cultured fibroblasts derived from true keloid, The 2nd Congress of the Asian Pacific Section of the International Confederation for Plastic and Reconstructive Surgery, 1977.8.

Oka, H., Yamamuro, T. & Takeda, T.: Die Mechanische Festigkeit des wachstumsknorpels unter dem Einfluss von Geschlechtshormonen. 64te Kongress der Deutschen Orthopädischen Gesellschaft. Würzburg, 1977.9.

竹田俊男：コラーゲン、エラスチン形成および成熟と内分泌、東京都立老人研講演会招待講演会（昭52.12）

3. 免疫グループ（森川他）

島根医大の研究室が整備される本年度末終了を目途に、森川グループの免疫学研究が、尚教室で進行中である。医員であった馬場君が島根医大の助手となり、アメリカ留学を終えた原田君が、本学非常勤講師を経て、島根医大助教授となり、森川教室の人事面での整備は順調に完了した。研究面では遅延型反応の解析が進行し、反応抑制的に働くTリンパ球の中に、抗原特異的に働くものと非特異的に働くものと別のであることを明らかにするこ

とが出来た。一方培養人癌細胞を使用する腫瘍抗原及び自己抗体の検出は、目下その抗原特異性に関連して研究が進行中であり、またマウス足蹠を利用する腫瘍免疫の初期反応に関する研究は、その方法が確立され、目下マウス可移植癌による本実験が進行中である。

〔誌 上 発 表〕

Baba, M., Harada, T., & Morikawa, S.: Studies on delayed hypersensitivity in mice. I. Physicochemical and biological properties of preferential antigens for developing delayed hypersensitivity in mice. *Acta Pathol. Jap.* 27(2): 165, 1977.

Morikawa, S., Baba, M., Harada, T. & Mitsuoka, A.: Studies on the delayed hypersensitivity in mice. III. Evidence for suppressive regulatory T₁-cell population in delayed hypersensitivity. *J. Exp. Med.* 145(2): 237, 1977.

伊藤元彦, 長瀬千秋, 光岡明夫, 永田明義, 原田孝之, 森川 茂: 気管支腺の機能と構造に関する研究(I)—感染防禦機構としての気管支腺の意義について, 日本胸部疾患学会雑誌15(4): 186. 1977.

原田孝之: 肝カタラーゼとラクトパーオキシデースの組織内分布に関する免疫組織学的研究, 神戸大学医学部紀要37(2): 1977.

〔学 会 発 表〕

森川 茂, 金沢 進, 松原義人, 池田貞雄, 巽 英二: 癌胎児性抗原産生人癌培養細胞における腫瘍抗原の特異性の検討, 第66回日本病理学会総会, 1977. 4.

馬場満男, 富山俊一, 光岡明夫, 森川 茂: フェリチンによるマクロファージ毒性及びその細胞性免疫への影響, 第66回日本病理学会総会, 1977. 4.

富山俊一, 原田孝之, 馬場満男, 森川 茂, 奥田 稔: マウス自然発生由来可移植性乳癌を用いた, 足蹠部移植による宿主防禦能の早期測定と定量化, 第36回日本癌学会総会, 1977. 10.

金沢 進, 原田孝之, 池田貞雄, 松原義人, 巽 英二, 森川 茂: 胃癌患者血清中にみられる腫瘍特異抗原に対する抗体の特異性. 第36回日本癌学会総会, 1977. 10.

光岡明夫, 寺松 孝, 富山俊一, 原田孝之, 馬場満男: マウス遅延型過敏症における非特異的 suppressor T細胞—cyclophosphamide 効果による解析, 第7回日本免疫学会総会, 1977. 11.

森川 茂, 富山俊一, 原田孝之, 馬場満男, 光岡明夫: 抗原特異的 T細胞によるマウスでの遅延型アレルギーの調節—T細胞による2重調節機構の存在, 第7回日本免疫学会総会, 1977. 11.

馬場満男, 鈴木幸雄, 森川 茂, 富山俊一, 原田孝之, 光岡明夫: Ferritin による macrophage 機能の選択的抑制及びその免疫反応解析への応用. 第7回日本免疫学会総会, 1977. 11.

小味淵智雄, 根来 昌, 峰谷 勉, 寺西征夫, 友野尚美, 内藤公一, 桂邦夫, 岡本暢夫, 森川 茂, 金沢 進: 人組織由来培養細胞を用いた自己抗体検出法による胃癌の検討, 第19回日本消化器病学会秋季大会, 1977. 11.

4. 化学発癌グループ(高橋他)

本グループにおける本年度最大のトピックスは、化学発癌剤代謝産物の同定のために、ガスマスを技術導入したことである。これは3-methylcholanthrene では成功し、すでにデーターを累積中であって、発表が遅滞することがなければ、これはまた世界初報となるであろう。代謝産物の純品を得て standard としなければならない点に苦心がある。benzpyrene に関しては目下 NIH の Dr. Gelboin の協力が得られている。臓器内代謝物の同定、定量と同時に、それらの発癌性が、マウス新生児の上でテストとされている。また発癌剤と組織成分との結合様式にも注意が払われている。尚高橋は、本年1月 New Orleanse で開かれた日米癌研究プロジェクトに参加、また9月マニラで開催の第3回アジア癌学会に出席、両学会において講演を行った。

〔学 会 発 表〕

木下和之, 高橋権也: 1-Hydroxy-3MC の発癌性, 肺癌学会関西支部会, 大阪, 1977. 1.

高橋権也, 木下和之, 安平公夫: ガスマスによる3-メチルコランスレン代謝産物の分離と同定, 第36回日本

癌学会総会（昭52.10）

高橋権也，鈴木康弘：GC-MS による 3-メチルコランソレン代謝産物の分離と同定，第2回医用マス研究会（昭52.10）

木下和之，高橋権也：3-メチルコランソレンによる経ミルク発癌：第3回日本癌学会総会（昭52.10）

Takahashi, G.: Excretion and distribution of an aromatic hydrocarbon (3-MC) in the body. U.S.-Japan Cooperative Cancer Research Program Conference. New Orleans. Jan. 23-26, 1977.

Takahashi, G.: Glutathione conjugation of 3-methylcholanthrene in the rat bile. The 3rd Asian Cancer Conference, Manila, Sept. 26-30, 1977.

〔誌 上 発 表〕

高橋権也，鈴木康弘：GC-MS による 3-メチルコランソレン代謝産物の分離と同定，医用マス研究会講演集 2：73-78（1977）.

Takahashi, G., Shah, H. & Weinhouse, S.: Metabolism of [^3H]-3-methylcholanthrene in the perfused rat liver. Cancer Res. 37: 369-375, 1977.

5. 表面活性物質研究グループ（鈴木他）

このグループは D-galactosamine を用いて LCAT 活性を阻害し，これによって肺表面活性物質中の主成分である dipalmitoyl lecithin (DPPC) の合成がどう変化するかを検討している。又，必須脂肪酸欠乏食を与えた動物の臓器のレシチン合成との関連についての検討も行っている。これは acyltransferase の substrate specificity に関して重要な知見を提供するものとなる可能性がある。しかし現在は尚臓器中の Acyl CoA の定量方法を確定しているところであって，本法の確立自体，脂肪酸代謝の生化学に大きい役割を果すことになる。尚新しく購入した GC-MS による脂質の同定，定量が進行中で，研究の飛躍的進展も期待される状態にある。

〔学 会 発 表〕

鈴木康弘，田畑良宏，大川欣一：ラット肺表面活性物質におよぼす D-galactosamine の影響，第66回日本病理学会総会（昭52.5）

鈴木康弘，田畑良宏：ラット肺表面活性物質に及ぼす D-galactosamine の影響。（第2報）-GC-MC によるレシチン分子種の検討，第5回日本界面医学会（昭52.12）

6. 臨床病理検査部（富山他）

本年は病理解剖例が20例を超過，これを機会に研究所の剖検例も，本年以降日本病理学会剖検掲報に掲載することに決定した。同掲報は back number と併せて図書室または病理検査部の何れかに設備したい希望である。尚現在正規の剖検が行なわれるのは昼間勤務時間中のみであって，時間外の解剖は担当の臨床医の協力によるものである。

7. 実験介助グループ（松下他）

小岸産休につき，代って坪田晴子が毎半日勤務。奥村は臨床検査技師資格獲得を目指し，目下京都保健専門学校臨床検査学科夜間部に在籍，勉強中。

〔主要論文抄録〕

1. Yamamuro, T., Hama, H., Takeda, T., Shikata, J. and Sanada, H.: Biomechanical and hormonal factors in the etiology of congenital dislocation of the hip joint Internat. Orthopaed. 2: , 1977.

perinatal の股関節脱臼は，機械的あるいは内分泌的要因に影響されるところが多いといわれている。今回山室教授及びその門下生が，竹田と協力して行った股関節脱臼実験は，ラッテを使用して行われたもので，持続的な

膝関節の伸展, 卵巣剔除, progesterone の投与等が脱臼の頻度を増加させ, 逆に psoas や hamstring muscle の切断, または estrogen の投与が脱臼抑止効果を示すことを明らかにした。

つぎに各種ホルモン投与時の股関節包コラーゲン, エラスチンの変化を調べたところ, estrogen 投下でコラーゲン量, コラーゲン溶解度が共に減少し, エラスチン量が著明に増加することが判明し, これらの変化が脱臼現象に重大な影響を与えていることが示唆された。

2. Morikawa, S., Baba, M., Harada, T. and Mitsuoka, A.: Studies on delayed hypersensitivity in mice. III. Evidence for suppressive regulatory T₁-cell population in delayed hypersensitivity. J. Exp. Med. 145(2): 237-248, 1977.

前報においては遅延型反応に係る抗原の物理化学的特性を明らかにし, その抗原活性が抗体産生能と逆相関を示すことを明らかにした。本報においては抗原としてメチル化人血清を, 動物としては C57BL/6J を使用し, 足蹠反応をもって遅延型反応の指標とするときは, 反応は動物の aging によって差があること, また反応の惹起を掌る T リンパ球と, 反応の抑制に働く T リンパ球とがあり, 後者は T₁ に, 前者は T₂ に属するものと判明し, 反応の出現は両リンパ球の拮抗如何によって変化することが明らかにされた。この抑制 T リンパ球の作用機序として, この細胞が増殖期にある antigen-reactive T cell に阻止的に作用する可能性が示唆された。

3. Takahashi, G., Shah, H. and Weinhouse, S.: Metabolism of [³H]-3-methylcholanthrene in the perfused rat liver. Cancer Res. 37: 369-375, 1977.

著者の一人高橋は, ラット, マウスの生体内における 3-methylcholanthrene (3-MC) の代謝及びその臓器分布について研究してきたのであるが, 本研究は Temple 大学 Fels 研究所において, Dr. S. Weinhouse 其他と共に行った実験の成果の一部をまとめたものである。元来 3-MC は水に難溶で, 灌流肝を流してその肝での代謝をみることは至難とされていたのであるが, 高橋はこの実験に成功し, 灌流肝より流出する胆汁其他を分析することにより, 3-MC の肝での代謝を詳細に明らかにすることが出来た。なお 3-MC は, 肝汁中には conjugate として排泄されるが, その排泄は灌流肝では雌に比べて雄に強く, retinal acetate や 7.8-benzoflavone の投与で影響されず, microsomal oxygenase inhibitor である 2-diethylaminoethyl-2, 2-diphenylvalerate でその80—90%が阻害され, cyclic AMP 添加で促進された。

細胞化学部

〔学 会 発 表〕

平井圭一：肺胞上皮細胞の再生とメタプラジアに関する電顕的研究, 京大胸部研学術講演会 (昭52.1)

平井圭一, H. Witschi., M. G. Cote：酸化防止剤 BHT による肺障害, 第33回日本電子顕微鏡学会 (昭52.5)

前田道之, 市川康夫：マウス骨髓性白血病細胞の増殖と分化, VII. LPS の分化促進作用について, 第36回日本癌学会総会 (昭52.10)

平井圭一, 前田道之, 市川康夫：マウス骨髓性白血病細胞の増殖と分化, VIII 電顕的観察, 第36回日本癌学会総会 (昭52.10)

杉山賢司, 穂積本男, 岡部純子, 市川康夫：腹水液およびアクチノマイシン D によるラウシャーウイルス誘発マウス骨髓性白血病細胞の分化, 第36回日本癌学会総会 (昭52.10)

平井圭一, 山内光昭, H. Witschi, H. G. Cote: Butylated hydroxytoluene (BHT) 投与マウスにおける肺胞上皮細胞 peroxisome の細胞化学的研究, 第18回日本組織細胞化学 (昭52.10)

〔誌 上 発 表〕

Maeda, M., Horiuchi, M., Numa, S. & Ichikawa, Y.: Characterization of a differentiation-stimulating factor for mouse myeloid leukemia cells. Gann 68; 435-447, 1977.

Horiuchi, M. & Ichikawa, Y.: Control of macrophage and granulocyte colony formation by two different factors. Exper. Cell Res. 110; 79-85, 1977.

Nagata, K., Ooguro, K., Saito, M., Kuboyama, M. & Ogasa, K.: A factor inducing differentiation of mouse myeloid leukemia cells in human amniotic fluid. *Gann* 68; 757-764, 1977.

Witshi, H., Hirai, K. & Cote, M. G.: Primary events in lung following exposure to toxic chemicals. In *Biochemical Mechanisms of Paraquat Toxicity* ed. by A. P. Autor, pp. 1-20. Academic Press, New York, 1977.

Hirai, K., Witshi, H. & Cote, M. G.: Electron microscopy of BHT-induced lung damage in mice. *Exp. Mol. Pathol.* 27; 295-308, 1977.

細菌血清学部

1. 免疫学に関する研究

Vesicular stomatitis virus (VSV) を replicate する T 細胞 (V-PFC) の性質と機能に関する研究から次のような点が明らかになった。マウスをヒツズ赤血球 (SRBC) で免疫した場合、ヘルパー T 細胞、遅延型過敏症 (DTH) のエフェクター細胞、およびサプレッサー細胞が出現する。サプレッサー細胞は免疫後の時期を異にしてナイロンウールに adherent なものと nonadherent なものが出現する。しかもいずれのサプレッサーも抗体産生にも DTH にも抑制性があり、これらが二種類の細胞の混合したものであるのか同一の細胞が両反応を抑制するのかは分らない。いろいろ検討した結果、V-PFC は adherent サプレッサーであると結論できた。(湊, 内科第二部門との共同研究)。

高橋 (医学部皮膚科) はハプテン抗原を用いて接触過敏症とヘルパー T 細胞の仕事を進めてきたが、同じ実験系において V-PFC の関与をしらべている。この事では SRBC の系では実験困難であった抗原特異性の問題など、より詳しい解析が可能であると考えられる。

西川 (内科第二部門) と共に進めているウシ血清アルブミンを抗原とした *in vitro* の抗体産生の仕事は、基礎的実験を終って論文作成中である。エンドトキシンの影響による T 細胞の分化に興味ある知見が得られつつある。

〔学 会 発 表〕

Minato, N., Katsura, Y. and Izumi, T.: Antigen reactive lymphocytes detected by virus plaque assay: Further characterization. 12th Joint Meeting Tuberculosis Panel. U.S.-Japan Co-operative Medical Science Program (1977. 9)

Takahashi, T., Ofuji, S., Nishikawa, S., Izumi, T. and Katsura, Y.: Anti-DNP antibody response after the topical application of DNFB in mice. XV International Congress of Dermatology. (Mexico City) (1977. 10)

西川伸一, 高沖宗夫, 泉 孝英, 桂 義元: 弱免疫原 (ウシ血清アルブミン) に対する免疫記憶の *in vitro* での解析, 第7回日本免疫学会総会 (昭52.11)

湊 長博, 桂 義元: ウイルス感受性抗原特異的 T 細胞の免疫学的性格, 免疫応答における役割, 第7回日本免疫学会総会 (昭52.11)

和田洋己, 西川伸一, 湊 長博, 寺松 孝, 桂 義元: 抗ハプテン抗体産生における carrier 反応性 B 細胞の影響, 第7回日本免疫学会総会 (昭52.11)

〔誌 上 発 表〕

Katsura, Y., Nakano, K., Kohara, Y. and Uesaka, I.: Cell-mediated and humoral immune responses in mice. I. Necessary conditions for the detection of delayed-type hypersensitivity. *Int. Arch. Allergy*, 53: 152, 1977.

Katsura, Y., Inaba, K., Izumi, T. and Uesaka, I.: Cell-mediated and humoral immune responses in mice. II. Sensitizing conditions for delayed-type hypersensitivity. *Int. Arch. Allergy*, 53: 329, 1977.

Katsura, Y.: Cell-mediated and humoral immune responses in mice. III. Dynamic balance between delayed-type hypersensitivity and antibody response. *Immunology*, 32: 227, 1977.

Katsura, Y., Takaoki, M., Nishikawa, S. and Muramatsu, S.: Cell-mediated and humoral immune responses in mice. IV. Difference of the functional cell population between helper activity and delayed-type hypersensitivity. *Immunology*, 32: 237, 1977.

Minato, N. and Katsura, Y.: Virus-replicating T cells in the immune response of mice. I. Virus plaque assay of the lymphocytes reactive to sheep erythrocytes. *J. Exp. Med.*, 145: 390, 1977.

Takahashi, C., Nishikawa, S., Katsura, Y. and Izumi, T.: Anti-DNP antibody response after the topical application of DNFB in mice. *Immunology*, 33: 589, 1977.

2. 微生物学に関する研究

研究内容は、基本的には、前年度のこの項に記しているものに一致している。

〔学 会 発 表〕

木村加寿子, 竹尾漢治, 上坂一郎: *Nocardia* の栄養菌糸と断裂過程の制御について, 第50回日本細菌学会総会 (昭52.4)

竹尾漢治, 中井栄一, 木村加寿子, 谷野輝雄: *Micropolyspora angiospora* の細胞膜 lipid の結晶性相転移, 第33回日本電子顕微鏡学会 (昭52.5)

中井栄一, 竹尾漢治: フリーズ・エッチングにおける切断のメカニズム——赤血球を用いて, 第33回, 日本電子顕微鏡学会 (昭52.5)

岡田誠太郎, 小川辰治, 森 竜男, 竹尾漢治, 藤原満喜夫: 抗酸菌の集落の走査電子顕微鏡的研究, 第50回日本らい学会総会 (昭52.5)

竹尾漢治: 酵母細胞生物学基礎講座, その1, 微細構造, (講師, 酵母研究会主催, 昭52.8)

岡田誠太郎, 西占 貢, 竹尾漢治, 藤原満喜夫: 抗酸菌の集落の走査電子顕微鏡的研究 (続報), 第23回 日本らい学会西部地方会 (昭52.11)

〔誌 上 発 表〕

Nishiura, M., S. Izumi, T. Mori, K. Takeo and T. Nonaka: Freeze-etching study of human and murine leprosy bacilli. *Intern. J. Leprosy and Other Mycobacterial Diseases* **45**, 248-254 (1977).

臨床肺生理学部および放射線科

〔学会, 研究会発表〕

大井元晴, 立石昭三: 気道狭窄症例の \dot{V} -V loops について, 京大胸部研胸部外科学部門, 臨床肺生理学部門研究会 (昭52.1)

田苗英次, 渡辺 裕, 岡本好史, 小川博暉, 松田光彦: 肺外科適応と気管支動脈造形, 同上 (同上)

北野司久, 柳橋 健, 弘野慶次郎, 宮林美福, 市谷迪雄: 肺癌の免疫学的アプローチに関する2, 3の問題点, 同上 (同上)

高山幸男, 後藤雅博, 延吉正晴, 伴 敏彦: 冠動脈造影と心電図の対比検討について, 同上 (同上)

倉田昌彦, 岡田英彦, 森本英夫, 池上佳典, 谷川敬一郎, 室本 仁: 胸部疾患の診断における胸腔鏡の意義, 同上 (同上)

加藤幹夫: 教室における臨床肺生理学的研究, 同上 (同上)

佐川弥之助: 息切れ, 呼吸困難の臨床, 奥丹医師会研究会 (昭52.1)

佐川弥之助: 特別講演, 肺生検, 第14回閉塞性肺疾患研究会 (昭52.1)

大井元晴: 慢生呼吸不全とその対策, 昭和52年度京大胸部研講演会 (昭52.1)

大井元晴, 佐川弥之助: 近畿地区における PPH 症例, 厚生省特定疾患原発性肺高血圧症調査研究班, 昭和51

年度総会（昭52. 2）

佐藤公彦, 李泰興, 佐川弥之助: Paraquat および 3-Methylindole の肺血管系におよぼす影響, 同上（同上）

原沢道美, 大崎 饒, 滝島 任, 芳賀敏彦, 佐竹辰夫, 佐川弥之助, 宮西通博, 長野 準: 本邦における PPII の第2次疫学調査, 同上（同上）

加藤幹夫: \dot{V}_A/\dot{Q} （シンポジウム, 喫煙と心肺機能）, 第17回日本胸部疾患学会総会（昭52. 4）

佐川弥之助: パネルディスカッション, Respiratory Care Unit (RCU) の現状と問題点, 同上（同上）

甲斐隆義, 宮本茂充, 桑原正喜, 滝 俊彦, ニッ矢義一, 松原義人, 船津武志, 二宮和子, 池田貞雄: 重篤な呼吸不全の対策とその指標, 同上（同上）

大井元晴, 浜本康平, 立石昭三, 中島道郎, 日置辰一郎, 折田雄一, 藤田正憲, 浅井信明, 加藤幹夫, 佐川弥之助: 慢性呼吸不全にたいする末梢化学受容体刺激剤 (Doxapram hydrochloride) の有効性について, 同上（同上）

佐藤公彦, 李 泰興, 佐川弥之助: Paraquat 肺炎に関する実験的研究, 同上（同上）

松原義人, 池田貞雄, 滝 俊彦, 桑原正喜, 宮本茂充, ニッ矢義一, 二宮和子, 甲斐隆義, 船津武志: 呼吸器疾患における CEA 測定の意義, 同上（同上）

桑原正喜, 池田貞雄, 宮本茂充, 滝 俊彦, ニッ矢義一, 松原義人, 二宮和子, 船津武志, 甲斐隆義: “自然気胸の保存的治療”——ハイムリッヒバルブの利用——, 同上（同上）

加藤達治, 藤田正憲, 加藤幹夫, 佐川弥之助: 肺胞上皮癌と珪肺症とを合併し, 肺内チタニウム含有量が高値を示した汎発性鞏皮症 (PSS) の1例, 同上（同上）

李 泰興, 加藤達治, 浅井信明: 右大動脈弓をともなった左肺動脈欠損症, 第43回日本循環器学会近畿地方会（昭52. 6）

宮本茂充, 宮本好博, 桑原正喜, ニッ矢義一, 松原義人, 二宮和子, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄: 自然気胸の両側手術17例の検討, 第20回日本胸部外科学会関西地方会（昭52. 6）

松延政一, 長瀬千秋, 伊藤元彦, 倉田昌彦, 岡田英彦, 横山和敏, 室本 仁, 田中 寛: コンピューター断層 (CT) の肺癌診断への応用について, 同上（同上）

北野司久, 高嶋義光, 弘野慶次郎, 宮林美福, 市谷迪雄: 肺癌における CEA の臨床的意義, 同上（同上）

弘野慶次郎, 市谷迪雄, 北野司久, 宮林美福, 柳橋 健: 横隔膜腫瘍2例, 同上（同上）

岡本好史, 松田光彦, 田苗英次, 小川博暉, 渡辺 裕: ASD 2次口欠損手術後に発症した MI, TI の1例, 同上（同上）

石原 浩, 安田隆三郎, 南 一明, 楠原健嗣, 鯉江久昭: 大動脈弁下狭窄症の3例について, 同上（同上）

太田和夫, 佐川弥之助, 加藤幹夫, 渡辺秀男, 加藤 実, 小野村敏信: 側彎症と肺機能, 第4報: 非観血的療法の肺機能に及ぼす影響について, 第48回中部整形災害外科学会（昭52. 7）

佐川弥之助: 老人性変化と慢性気管支炎, 山城医師会総会（昭52. 7）

加藤幹夫: 酸・塩基調節, 第17回臨床肺機能講習会（昭52. 8）

佐川弥之助: 肺循環, 同上（同上）

佐藤公彦, 佐川弥之助, 竹田俊男: パラコート肺に関する実験的考察, 第10回 FLD シンポジウム（昭52. 9）

竹田俊男, 佐藤公彦, 佐川弥之助: 線維性蛋白の成熟, 特に Lysyl oxidase との関連について, 同上（同上）

浅井信明, 佐藤公彦, 李 泰興, 李 勝弘, 佐川弥之助: 肺挫傷に於ける ARDS の病態生理, (シンポジウム: 胸部外傷), 第30回日本胸部外科学会総会（昭52. 9）

北野司久, 高嶋義光, 弘野慶次郎, 市谷迪雄: 肺癌の免疫化学療法の可能性……Target cell の Antigenicity の立場からの検討, 同上（同上）

倉田昌彦, 岡田英彦, 横山和敏, 近藤敬一郎, 室本 仁, 田中 寛, 松延政一, 長瀬千秋, 伊藤元彦: CT スキャンによる縦隔腫瘍の検討, 同上（同上）

市谷迪雄, 北野司久, 弘野慶次郎, 高嶋義光, 宮林美福, 倉田昌彦: 70才以上の肺癌の手術と術前の肺機能, 同上（同上）

松原義人, 池田貞雄, 桑原正喜, 甲斐隆義, 宮本茂充, ニッ矢義一, 宮本好博, 二宮和子, 船津武志: 胸壁,

心のう、横隔膜合併切除の対策：人凍結乾燥硬膜の使用，同上（同上）

佐川弥之助：救命ならびに救急処置，急性呼吸不全，第5回日本胸部外科学会卒後教育セミナー（昭52.9）

K. Ohta., Y. Sagawa., M. Kato., H. Watanabe., M. Kato., T. Onomura: Pulmonary function in idiopathic scoliosis, Annual meeting of Scoliosis Research Society, (52. 10)

藤田正憲，加藤幹夫：呼吸ガスの平均肺胞気分圧と死腔量の新しい測定法について，第13回日本胸部疾患学会近畿地方会（昭52.11）

加藤幹夫：特別講演，最近の肺機能検査の動向，第23回日本麻酔学会関西地方会（昭52.10）

林 隆義，島田一恵，大井元晴，加藤幹夫，佐川弥之助：吸入 O₂ 濃度と血液ガスとの Dose-Response 関係について，同上（同上）

青木 稔，松本守海，松谷之義，山本博昭，加藤幹夫：ストレインゲージによる呼吸パターンの分析，同上（同上）

近藤敬一郎，倉田昌彦，岡田英彦，横山和敬，室本 仁，本田裕宏，泉 孝英：開胸肺生検を行った PIE 症候群（遷延型）の1例，同上（同上）

三嶋理晃，李 泰興，佐藤公彦，加藤幹夫，佐川弥之助：縦隔に認められた Germinoma の1例，同上（同上）

徐 航霄，佐藤公彦，加藤幹夫，佐川弥之助：オゾン曝露に関する実験的研究，同上（同上）

田村伸介，重本 歴，榎垣寛治，西本洋二，瀬野 武，山本徹也，鍋島健治，岸本 亮，北田 修，杉本忠彦，武田俊彦，大鶴 昇，菊池英彰，杉田 実，宝来善次，中川正清，久野健志：びまん性間質性肺炎の1例，同上（同上）

佐藤公彦，島田一恵，加藤達治，加藤幹夫：低酸素血症をとめない急速な経過をたどった肺臓炎，同上（同上）

藤田正憲，加藤幹夫，佐川弥之助：呼吸ガスの平均肺胞気分圧と死腔量の新しい測定法について，第3回中国・九州肺機能同好会（昭52.11）

藤田正憲：呼吸ガスの平均肺胞気濃度と死腔量の新しい測定法について，第5回胸部研談話会（昭52.11）

佐川弥之助：息切れと肺疾患，奈良県吉野郡医師会講演会（昭52.11）

浅井信明，佐藤公彦，李 泰興，李 勝弘，佐川弥之助：組織学的所見よりみた左肺挫傷の問題，第5回日本救急医学会総会（昭52.11）

佐川弥之助：臨床肺生理学の展望，三重大学医学部胸部外科教室開講20周年記念講演会（昭52.12）

〔誌 上 発 表〕

佐川弥之助：肺化膿症，治療，59：407，1977.2.

佐川弘之助，大井元晴：肺循環，Medical Scope，呼吸・循環・血液シリーズ⑤，日医ニュース，372：10, 1977.3.

原沢道美，大崎 饒，滝島 任，芳賀敏彦，佐竹辰夫，佐川弥之助，宮西通博，長野 準：本邦における PPH の第2次疫学調査，厚生省特定疾患原発性肺高血圧症調査研究班昭和51年度研究業績，37，1977.3.

大井元晴，佐川弥之助：近畿地区における PPH 症例，同上，27，1977.3.

佐藤公彦，李 泰興，佐川弥之助：Paraquat および 3-Methylindole の肺血管系におよぼす影響，同上，181，1977.3.

浅井信明：今日の治療指針分担執筆，胸部外傷，医学書院，1977.3.

折田雄一：強制呼出時の気道動態について，京大胸部研紀要，10：74，1977.3.

加藤幹夫：CO₂ ナルコーシス，Medical Scope，呼吸・循環・血液シリーズ⑧，日医ニュース，375：9，1977.4.

加藤幹夫：VA/Q（第17回日本胸部疾患学会総会シンポジウム（Ⅱ）），日胸疾会誌，15：580，1977.9.

加藤幹夫：新しい胸部外科の臨床，分担執筆，胸部外科における機能的診断と病態生理，酸塩基平衡，杏林舎，1977.9.

佐川弥之助：同上，救命救急処置，急性呼吸不全，同上，同上.

山本博昭，加藤幹夫：臨床呼吸器病講座分担執筆，第3巻，各論Ⅱ：膿胸，金原出版 K. K.，1977.10.

加藤幹夫：Chloride shift, Medicina 14: 145, 1977. 10.

佐川弥之助：RTD (Respiratory Therapy Department), 日胸疾会誌, 15 : 669, 1977. 10.

加藤幹夫, 加藤弘文, 長瀬千秋, 山田久和, 大井元晴：術前肺機能検査, 呼吸と循環, 25 : 1011, 1977. 11.

佐川弥之助：Traumatic wet lung, Medicina, 14; 1537, 1977. 11.

太田和夫, 加藤幹夫, 佐川弥之助, 加藤 実, 渡辺秀男, 樫本龍喜, 小野村敏信：側彎症の肺機能, 臨床整形外科, 12 : 1034, 1977. 11.

浅井信明：外科と病態生理分担執筆, 病態生理からみた胸部外傷の手術適応, 南江堂, 1977. 12.

山田久和, 佐川弥之助：呼吸機能検査法の歩み, Clinical Laboratory, 10: 379, 1977. 12.

佐川弥之助：肺内水分量の測定 (1), 呼吸と循環, 25 : 1084, 1977. 12.